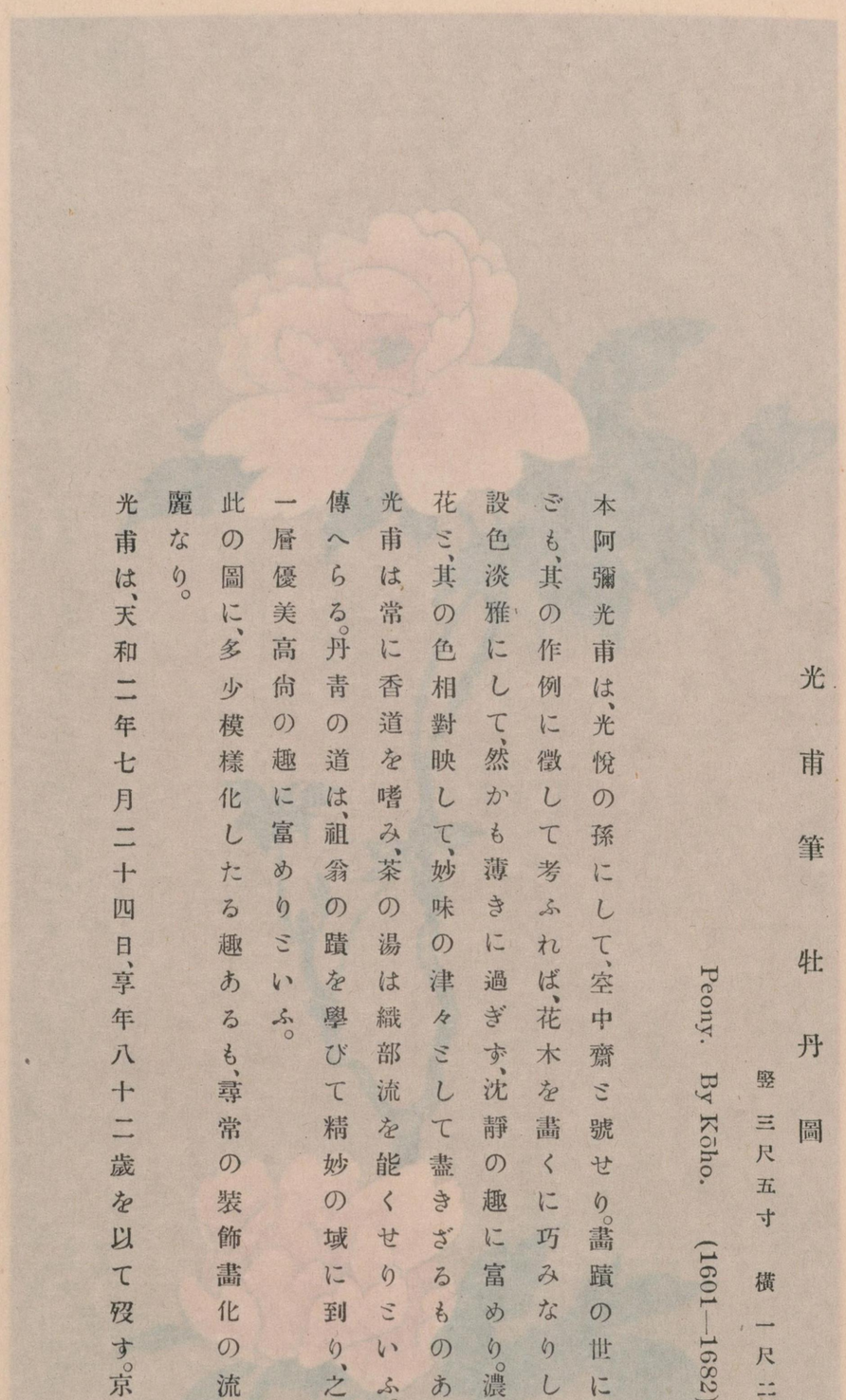


光甫筆牡丹圖

竪三尺五寸　横一尺二寸五分

Peony. By Kōho.　(1601—1682)

東京帝室博物館藏

本阿彌光甫は、光悦の孫にして、空中齋と號せり。畵蹟の世に遺存するもの、多からざれども、其の作例に徵して考ふれば、花木を畵くに巧みなりしものゝ如し。本圖に觀るも、設色淡雅にして、然かも薄きに過ぎず、沈靜の趣に富めり。濃綠の葉と、極めて淡き紅の花と、其の色相對映して、妙味の津々として盡きざるものあり。

光甫は、常に香道を嗜み、茶の湯は織部流を能くせりといふ。又製陶の術にも長ぜりと傳へらる。丹靑の道は、祖翁の蹟を學びて精妙の域に到り、之れによりて陶器の製作も、一層優美高尙の趣に富めりといふ。

此の圖に、多少模樣化したる趣あるも、尋常の裝飾畵化の流弊に陷らず、筆致極めて流麗なり。

光甫は、天和二年七月二十四日、享年八十二歲を以て歿す。京都光悦寺に葬ると傳ふ。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

小川笠翁筆　南天圖

The Nandina domestica. By Ritsuō Ogawa.
(1663—1747)

男爵　九鬼隆一君藏

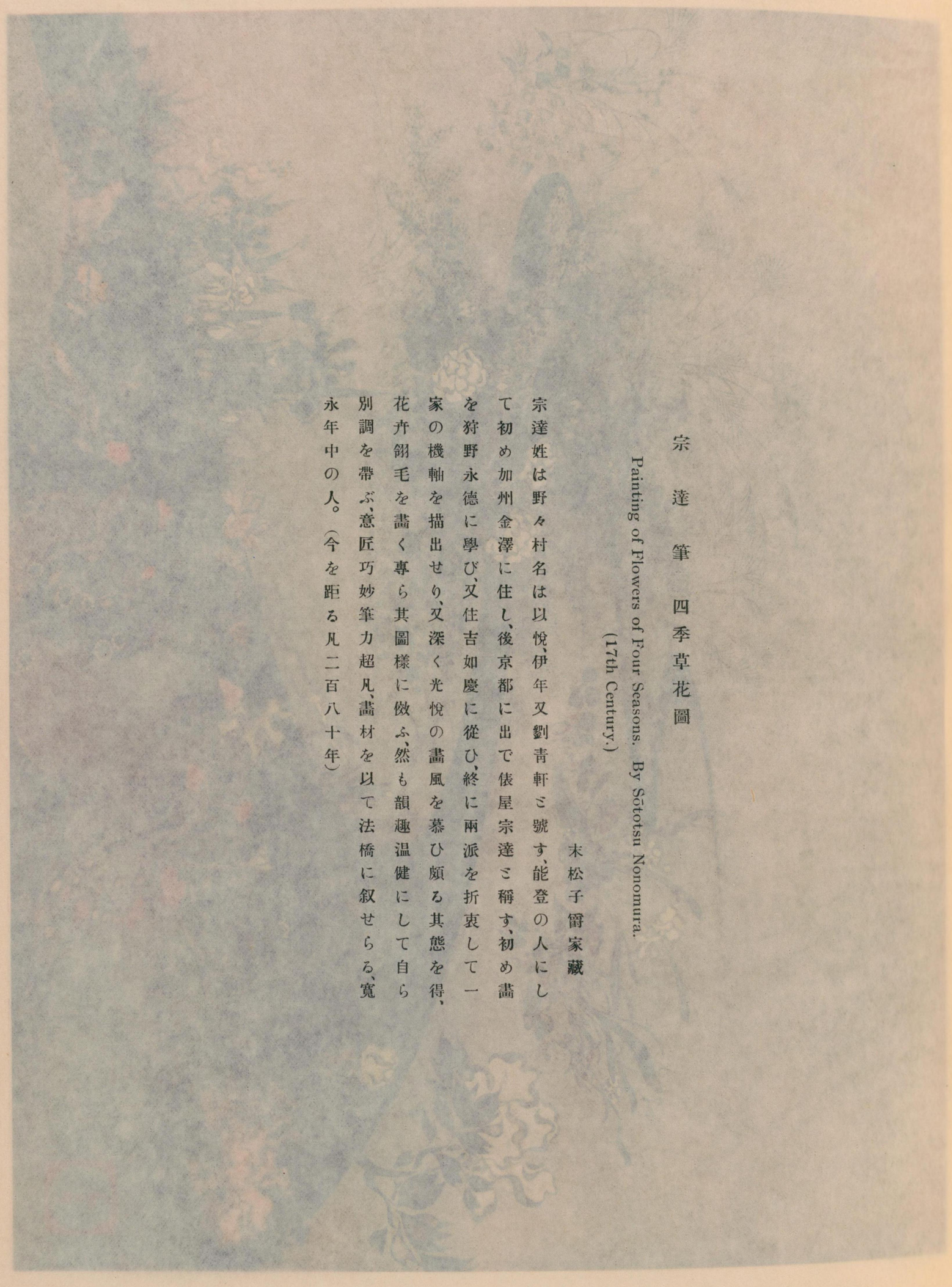
笠翁名は宗宇、字は尚竹といふ、子蟬、卯觀子、夢中庵等の號あるも、笠翁若くは破笠翁の號最も世に著し。畵風精緻、設色亦頗る巧みなり。畵を當代の名家光琳に學ぶといふ。笠翁は寛文三年を以て生れ、八十五歲の長壽を保ちて、延享四年に逝けり。文學美術の精華燦然たりし元祿の盛世は、恰かも其の壯年期に當れり。多趣多藝の天分豐かなりし彼れの藝術的才能の、各方面に發揮さるゝに至りしは、當然のことといふべし。

彼れの製作に成るものとしては、繪畵の外、漆器、陶器並に金屬彫刻に於ても觀るべきもの甚だ多く、漆器の技を光悅に學び、意匠頗る巧妙。牙角鉛錫の類を用ふる象眼製作に長ず。世に之れを破笠細工と呼びて賞用せり。又俳諧を斯道の名家芭蕉翁に習ひ、破笠若くは笠翁の號も、淡雅なる俳味に基きたるものなりとも傳ふ。多樣なる趣味ありて、各〻其の道に得る處ありしは、之れに由りて知り得べし。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

小川芝香華　南天圖

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4



宗達筆　四季草花圖

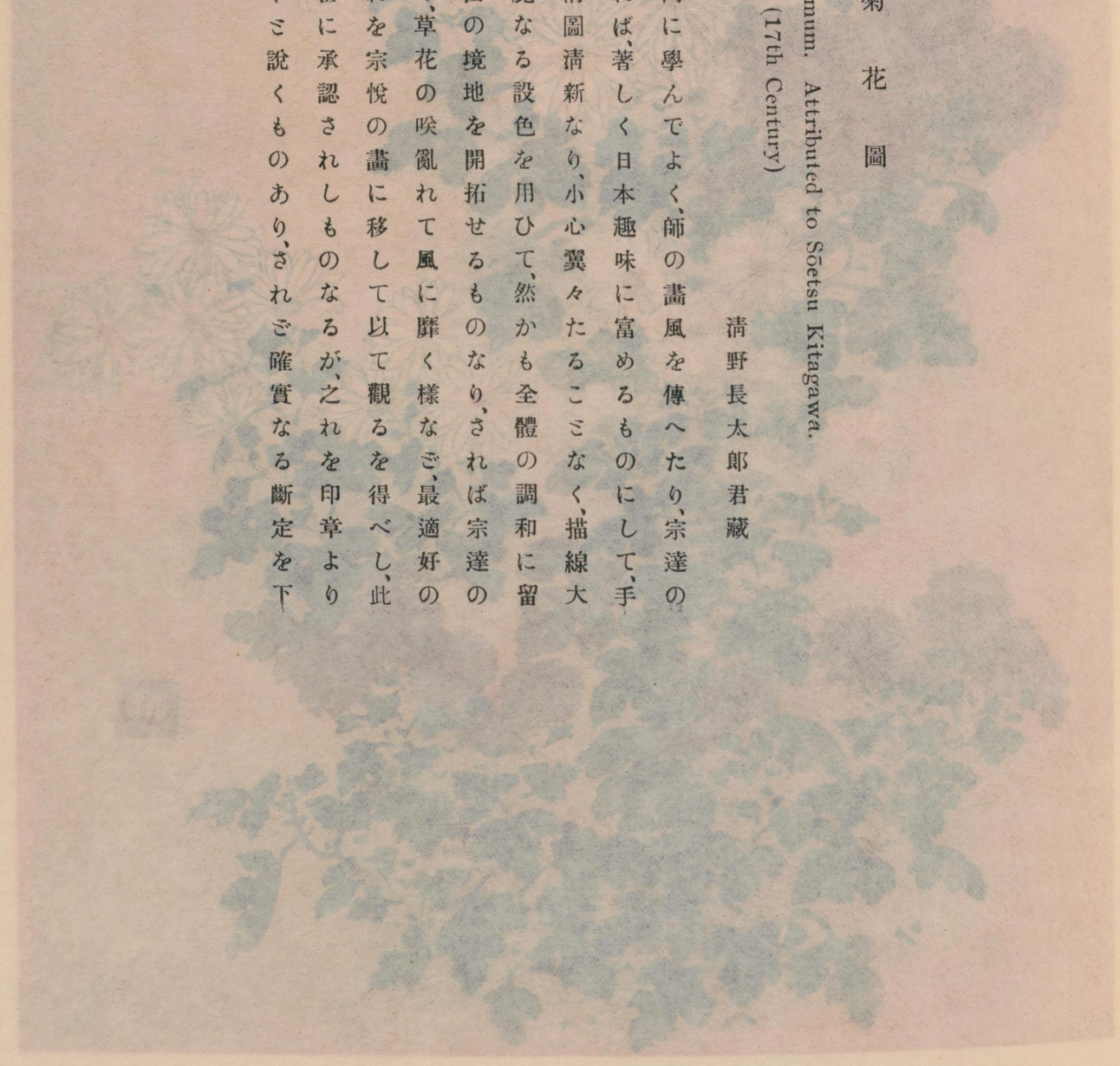
Painting of Flowers of Four Seasons. By Sōtotsu Nonomura.
(17th Century.)

末松子爵家藏

宗達姓は野々村名は以悦、伊年又劉青軒と號す、能登の人にして初め加州金澤に住し、後京都に出で俵屋宗達と稱す、初め畫を狩野永德に學び、又住吉如慶に從ひ、終に兩派を折衷して一家の機軸を描出せり、又深く光悦の畫風を慕ひ頗る其態を得、花卉翎毛を畫く專ら其圖樣に倣ふ、然も韻趣温健にして自ら別調を帶ぶ、意匠巧妙筆力超凡、畫材を以て法橋に叙せらる、寛永年中の人。（今を距る凡二百八十年）

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4



傳喜多川宗悅筆　菊花圖

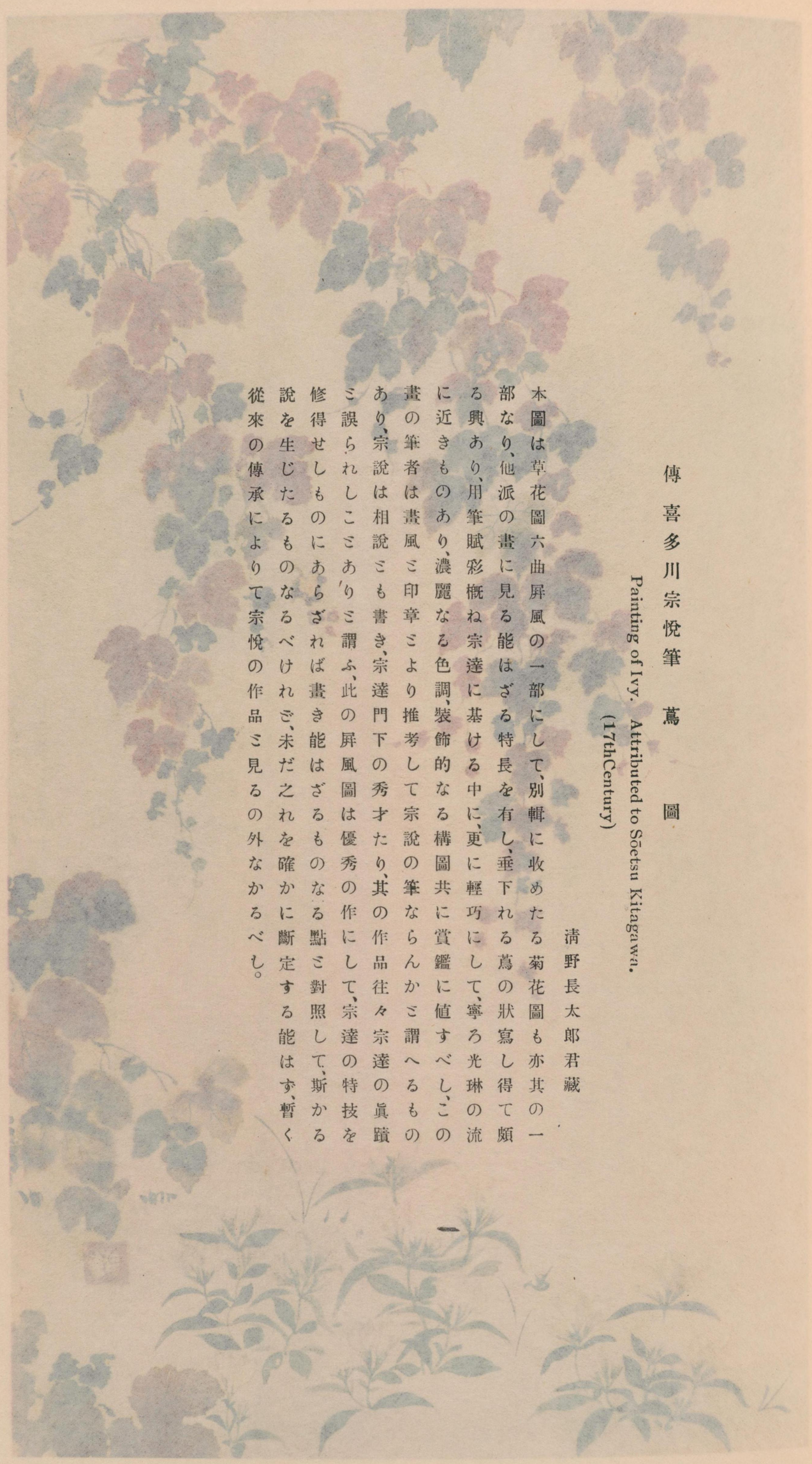
Painting of Chrysanthemum. Attributed to Sōetsu Kitagawa.
(17th Century)

清野長太郎君藏

宗悅、姓は喜多川、始俵宗達の門に學んでよく、師の畫風を傳へたり、宗達の畫は元來之れを漢畫に比すれば、著しく日本趣味に富めるものにして、手法多く獨創の見に基き、其の構圖清新なり、小心翼々たるこゝなく、描線大膽にして、細部に拘泥せず、濃麗なる設色を用ひて、然かも全體の調和に留意し、舊套に捕はれずして自由の境地を開拓せるものなり、されば宗達の畫く所、遠見の効果殊に著しく、草花の唉亂れて風に靡く樣なご、最適好の題材たり、宗達の畫の長所、之れを宗悅の畫に移して以て觀るを得べし、此の圖は宗悅の筆こして從來世に承認されしものなるが、之れを印章より推及して、宗悅の筆にあらずやこ說くものあり、されご確實なる斷定を下すに足れる材料未だ存せず。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4



傳喜多川宗悅筆　蔦圖

Painting of Ivy. Attributed to Sōetsu Kitagawa.
(17thCentury)

清野長太郎君藏

本圖は草花圖六曲屏風の一部にして、別輯に收めたる菊花圖も亦其の一部なり、他派の畫に見る能はざる特長を有し、垂下れる蔦の狀寫し得て頗る興あり、用筆賦彩概ね宗達に基ける中に、更に輕巧にして、寧ろ光琳の流に近きものあり、濃麗なる色調、裝飾的なる構圖共に賞鑑に値すべし、この畫の筆者は畫風ヨリ印章ヨリ推考して宗說の筆ならんかヨ謂へるものあり、宗說は相說ヨも書き、宗達門下の秀才たり、其の作品往々宗達の眞蹟ヨ誤られしことありヨ謂ふ、此の屏風圖は優秀の作にして、宗達の特技を修得せしものにあらざれば畫き能はざるものなる點ヨ對照して、斯かる說を生じたるものなるべけれど、未だ之れを確かに斷定する能はず、暫く從來の傳承によりて宗悅の作品ヨ見るの外なかるべし。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

柳里恭筆花卉圖

Painting of the Flowers in Autumn.　By Ryurikyo.

(1705—1758)

男爵 細川潤次郎君藏

柳里恭、姓は柳澤氏、名は里恭、字は公美、淇園、竹溪、玉桂等の諸號あり、通稱を權太夫といふ。大和郡山の城主柳澤家の族臣にして其の才文武を兼ね、佛典、醫方、音律、書畫、篆刻等十六種の學藝に通曉し、何れも人の師たるに足る技能を有したりといふ。性濶達洒落にして賓客を好み、訪るゝものある時は貴賤と才不才とを問はず厚くこれを禮して接見し、以て食客たらしめ、日々に其の所長の藝能を試ましむるを樂とせり。されば家祿豐かなるに拘らず、生計常に乏しかりきといふ。實に彼は其の身一國の老職として公務繁褥、奉公の爲めに生涯中一の私日なきにして、汎く元明諸名家の古法を摸して得る所あり。遂に一家の風を成し、花卉、人物、山水、墨竹等に巧なりしが、特に濃彩の花果人物を以て其の所長としたり。柳里恭は設色の法を祇園南海に學び、南海は之を明人朱舜水に承けたりと、以て其の學習の過程を想見するに足るものあり。本圖は其の取材に於ても、表現の手法に於ても、柳里恭獨特の技能を發揮したるを見るべく、また會心の作たるに背かざるなり。細巧纖勁の筆致、鮮麗の賦彩よく彼の所長を窺ふを得べし。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

宋紫石筆　雨中雞圖

絹本　竪三尺九寸　横一尺七寸六分

Painting of a Cock in the Rain. By Sōshiseki.
(1712—1786)

藤懸靜也君藏

清人沈南蘋の長崎に渡來するや、我が繪畫界は彼が偉大なる感化を蒙り、精緻濃麗なる寫生畫は頓に流行を來すに至り、熊斐之を傳承し、玆に清新なる一流派を創め、其の畫風長崎の小天地にのみ屈蹙せずして、早く江戸に傳はれり。これ黑川龜玉の力なりしと雖、惜むべし早世せしかば未だよくこの流を興すに足らざりき。宋紫石出づるに及びて、よくその畫風を江戸に普及せしむるに至れり。

宋紫石は楠本氏、字は君赫、通稱幸八郎、雪溪又は霞亭といひ、後雪湖と號せり。江戸の人にして幼より畫を好み、長ずるに及び長崎に遊びて、熊斐に從ひて畫を學ぶ。是の時に當り清人宋紫岩亦長崎に來遊す。即ち紫石彼に畫法を質し、よく其の法に精熟するを得て、南蘋の筆意をも會得し、遂に宋氏を冒して名を紫石と改めたり。山水花卉走獸翎毛等其の巧緻を極む。著はす所、宋氏畫譜及び畫藪會畫あり、世に行はる。紫石人と爲り强直質朴、敢て高貴に阿ることなかりしといふ。日本橋南四丁目に居住し、天明六年三月十一日歿す、年七十五。或はいふ七十二。淺草本願寺中德本寺に葬る。子紫山家を嗣ぎ、家法を墜さず。門人諸葛監、董九如、晁有輝等最も著はる。

本集收むる所の雨中雞圖は彼が精細巧緻を盡せる筆致と濃麗精密の賦彩を以てせる花卉翎毛圖の代表的傑作といふべく、彼が遺作中稀有のものと稱すべし。欵識に辛卯初夏とあるによりて明和八年彼正に六十歳畫技圓熟の境に達せる折に成れるものなり。雄々しき家雞の風雨に凛乎たる雄姿を表したる構圖には、觀者は家雞以外に或る偉大なる含畜に刺激せらるゝの感あらん。實に紫石は啻に細巧なる寫實の末節にのみ走りたるものにあらざるを知るべし。以て彼が理想の那邊に存したるかを忖度すべきにあらずや。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

熊斐筆　蓬島雙鶴圖

絹本　竪三尺六寸　横一尺二寸

Painting of the Storks in the Island of Perpetual Youth.　By Yuhi.
(1713–1772)

西川忠亮君藏

熊斐字は淇瞻、繡江ミ號す。氏を熊代ミ云ひ、名を斐ミ呼ぶ。通稱は彥之進、後に甚左衞門ミ改む。長崎の人にして、其の家代々唐通事に任ず。熊斐幼より丹青の道を好み、長崎の畵家渡邊氏に就きて學び、大に得る所あり。淸人沈南蘋の來るに及び、遂に其の秘蘊を受く。蓋し彼が精勵沈氏を動かせしミ、其の技卓拔なるものありしによれり。

彼始め沈氏に學ぶや、即ち蘭一葉を寫して與へられたり。習技一兩日にして、これを師に示すに、南蘋捨てゝ顧みず、或人熊斐に告げて曰はく、子先生の法を得んミ欲せば、一葉を學ぶに三十日許にしてこれを示せミ、熊斐其の言の如くす、南蘋其の筆蹟を見て、大に喜び、又梅竹を畵いて與へたり。熊斐益々勵精是れつミめ、遂に其の堂に上るを得たり。また彼は極めて寫生に着實にして、よく其の眞を捉ふるにつミめたり。幕府甞て彼に命して虎を畵かしむ。會々海外より虎を舶載し來る、彼喜びて其の眞象を寫さんミ欲し、乃ち筆硯を持し、衆ミ共に往て觀る。虎俯して首を低くし、其の活動の態を見る能はず、因りて竹竿を以て突くに、虎則ち怒つて、頭を擡げ眼光電發、閃々人を射る、傍人怖れて遁れ去る。彼獨り神色自若、其の眞を寫し得て歸れりミいふ。以て彼が寫生に對する態度を知るべし。

されば花卉翎毛の類を寫しても、細巧精緻を致し、よく寫實の妙を得たりしは偶然にあらざるなり。蓬島雙鶴圖の如きは、よく沈氏の法を得たりミいふべく、雙鶴の筆致、巧麗にして、波濤の手法勁健堅實を致し、よく全幅の諧調を保ち、溫雅優麗の趣致を發揮せるは、彼が花鳥に秀拔の技を有せしを知るに足るべく、南蘋派の世に廣く行はるゝに至りしは、彼の力に俟つこミ最も多しミいふべし。安永元年十二月二十八日歿す、時に年六十。

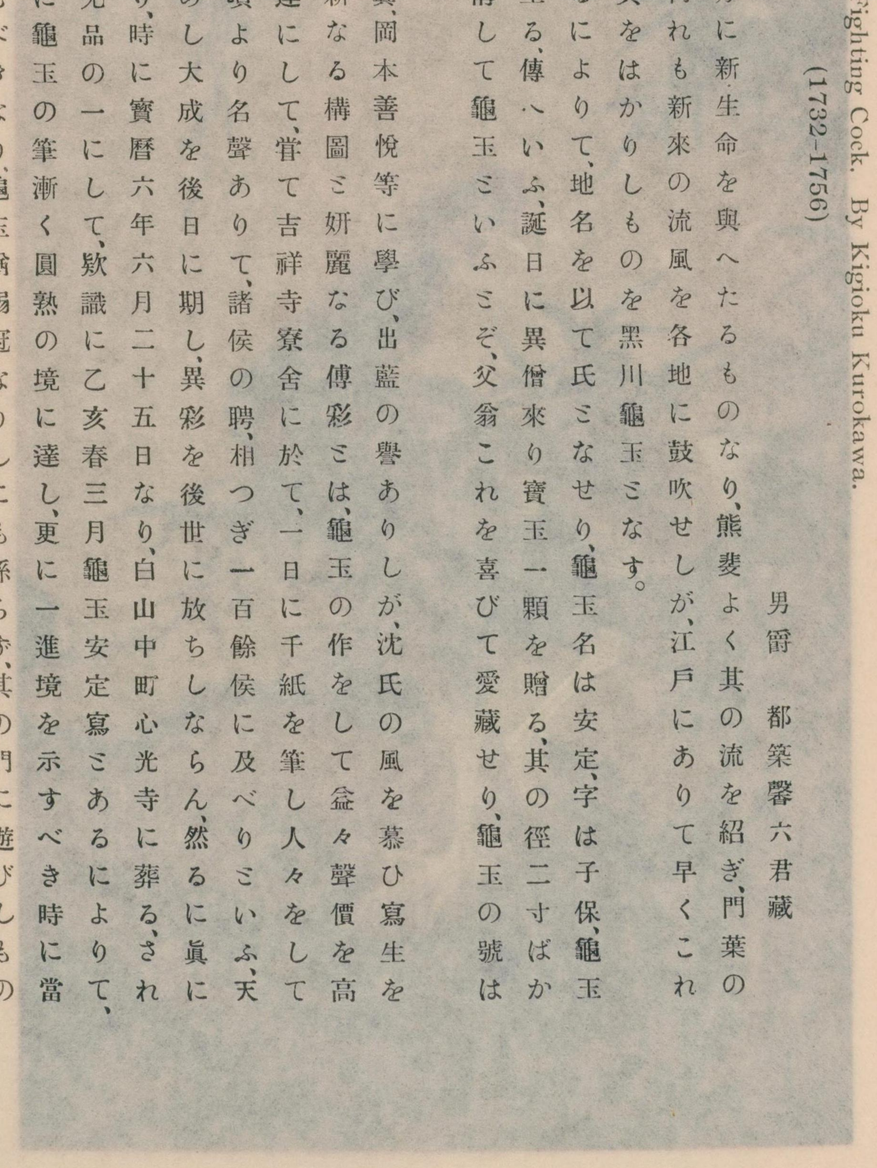
国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

黒川龜玉筆鬪雞圖

絹本　竪四尺六寸四分　横一尺七寸九分

Painting of a Fighting Cock. By Kigioku Kurokawa.

(1732-1756)



男爵　都築馨六君藏

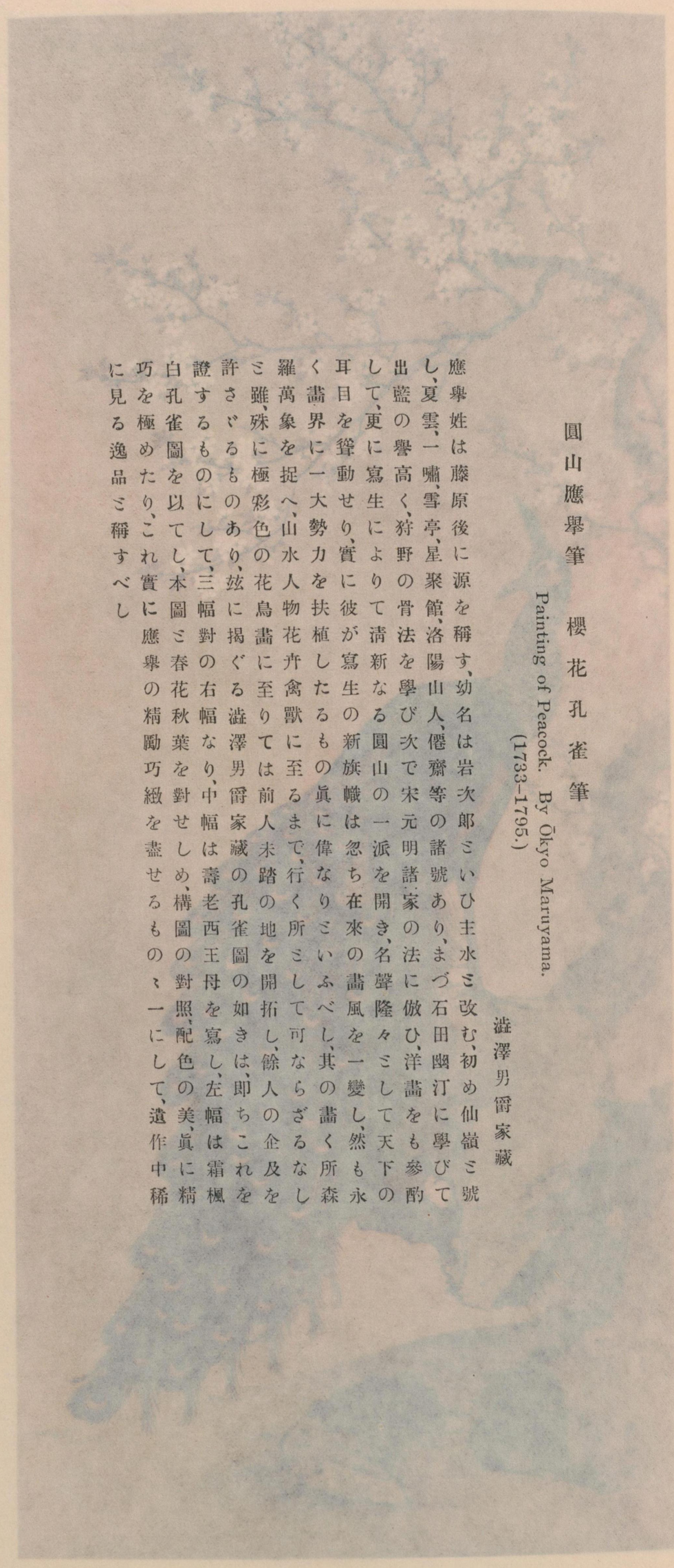
沈南蘋の渡來は、我が畫壇の墮氣を破り、一方に新生命を與へたるものなり、熊斐よく其の流を紹ぎ、門葉の諸家、建凌岱、宋紫石、松林山人、董九如、森蘭等何れも新來の流風を各地に鼓吹せしが、江戸にありて早くこれ等諸氏に先んじ、沈氏の流を汲みて其の勃興をはかりしものを黒川龜玉とす。

龜玉の祖は、甲斐國黒川村に住せしことありて、地名を以て氏とせり、龜玉名は安定、字は子保、龜玉は其の號なり、享保十七年十月二十八日に生る、傳へいふ、誕日に異僧來り寶玉一顆を贈る、其の徑二寸ばかりありて、色は藍の如く、光彩人を射る、是を稱して龜玉といふことぞ、父翁これを喜びて愛藏せり、龜玉の號は即ちこれに因めるものなりといふ。

龜玉幼より畫を好みしを以て、先づ狩野休眞、岡本善悦等に學び、出藍の譽ありしが、沈氏の風を慕ひ寫生を以て、鳥獸草木の類を寫し、宛然眞に逼る、斬新なる構圖と妍麗なる傳彩とは、龜玉の作をして益々聲價を高からしめたり、龜玉は筆の運用頗る巧妙轄達にして、嘗て吉祥寺寮舍に於て、一日に千紙を筆し人々をして其の才筆に驚歎せしめたり、既に八九歳の頃より名聲ありて、諸侯の聘、相つぎ一百餘侯に及べりといふ、天もしかくの如き天才の人に年を假さば、定めし大成を後日に期し、異彩を後世に放ちしならん、然るに眞に惜むべし、僅に二十五歳の短命を以て歿せり、時に寶暦六年六月二十五日なり、白山中町心光寺に葬る、されば其の遺作は多からず、本圖の如きは彼の尤品の一にして、歿識に乙亥春三月龜玉安定寫とあるによりて、寶暦五年彼が二十四歳の作なるを知る、實に龜玉の筆漸く圓熟の境に達し、更に一進境を示すべき時に當りて、人生の最大災厄に遇ひて萬事休す、惜むべきなり、龜玉猶弱冠なりしにも係らず、其の門に遊びしもの少なからず、田英、岡野龜石、脇坂一道等著はる。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4



圓山應擧筆　櫻花孔雀筆

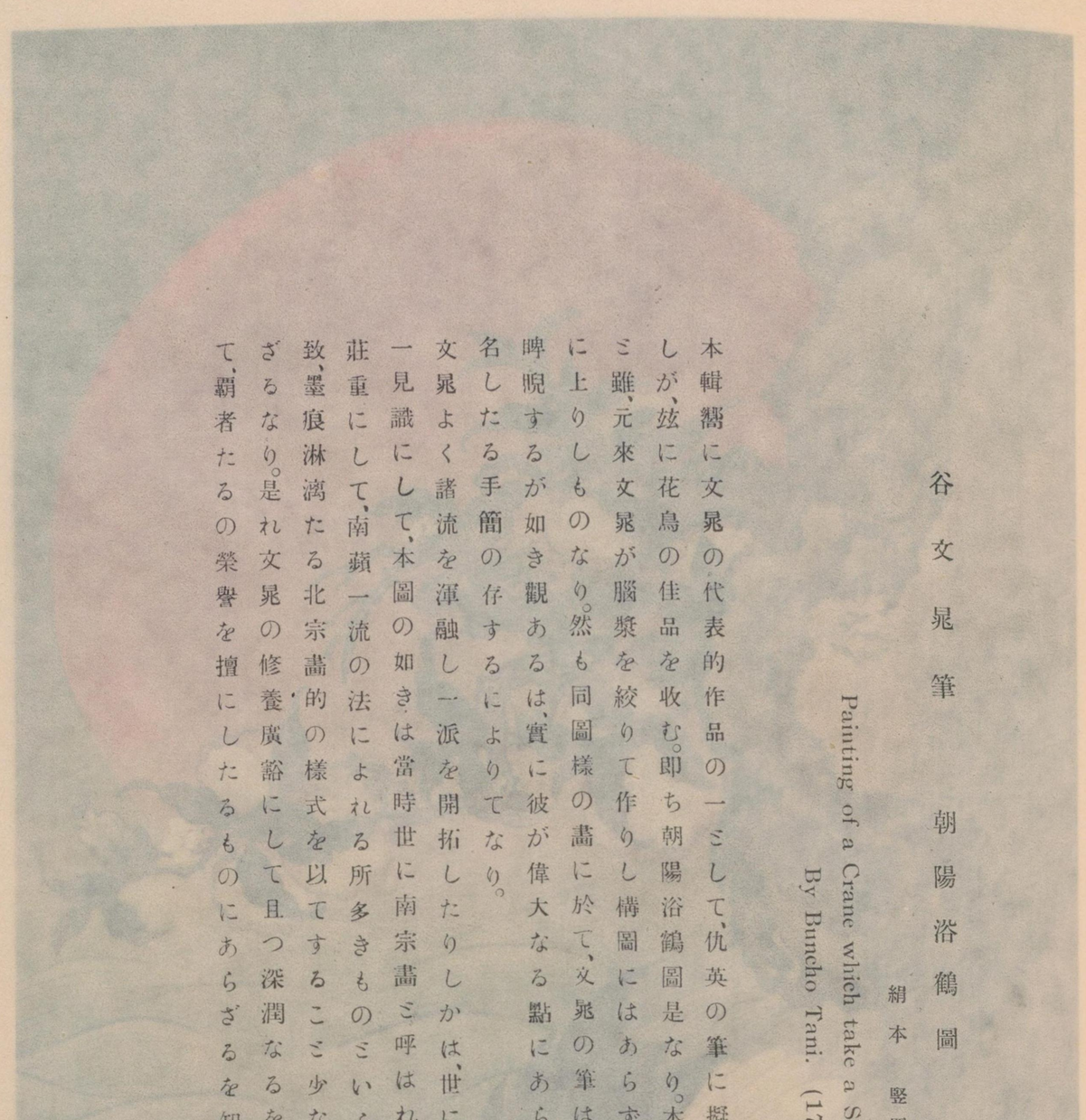
Painting of Peacock. By Ōkyo Maruyama.
(1733–1795.)

澁澤男爵家藏

應擧姓は藤原後に源を稱す、幼名は岩次郎といひ主水と改む、初め仙嶺と號し、夏雲、一嘯、雪亭、星聚館、洛陽山人、僊齋等の諸號あり、まづ石田幽汀に學びて出藍の譽高く、狩野の骨法を學び次で宋元明諸家の法に倣ひ、洋畫をも參酌して、更に寫生により清新なる圓山の一派を開き、名聲隆々として天下の耳目を聳動せり、實に彼が寫生の新旗幟は忽ち在來の畫風を一變し、然も永く畫界に一大勢力を扶植したるもの眞に偉なりといふべし、其の畫く所森羅萬象を捉へ、山水人物花卉禽獸に至るまで、行く所として可ならざるなし、雖、殊に極彩色の花鳥畫に至りては前人未踏の地を開拓し、餘人の企及を許さゞるものあり、茲に掲ぐる澁澤男爵家藏の孔雀圖の如きは、即ちこれを證するものにして、三幅對の右幅なり、中幅は壽老西王母を寫し、左幅は霜楓白孔雀圖を以てし、本圖と春花秋葉を對せしめ、構圖の對照、配色の美、眞に精巧を極めたり、これ實に應擧の精勵巧緻を盡せるものゝ一にして、遺作中稀に見る逸品と稱すべし

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4



谷文晁筆　朝陽浴鶴圖

絹本　竪四尺二寸三分　横二尺二寸三分

Painting of a Crane which take a Sea-bathing, in the morning.

By Buncho Tani. (1763—1840.)

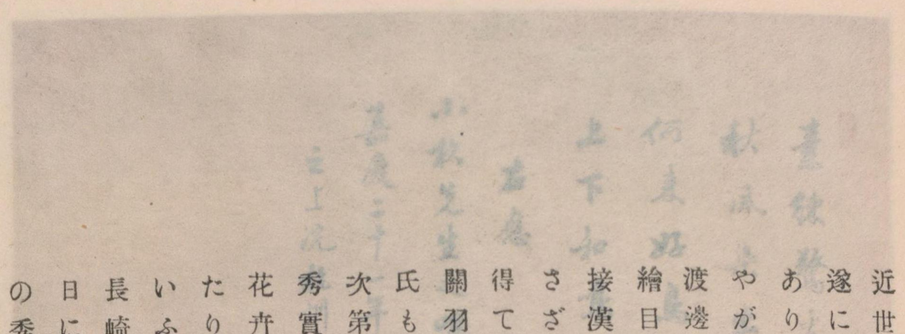
村上濱吉君藏

本輯嚮に文晁の代表的作品の一として、仇英の筆に擬したる人物畫（加官進祿圖）を收載したりしが、茲に花鳥の佳品を收む。即ち朝陽浴鶴圖是なり。本圖は布置警拔、設色莊麗頗る豪快の氣に富むこと雖、元來文晁が腦漿を絞りて作りし構圖にはあらずして、世に蟠桃海鶴圖と稱して、往々畫家の筆に上りしものなり。然も同圖樣の畫に於て、文晁の筆は嶄然として頭角を顯はし、巍然として群小を睥睨するが如き觀あるは、實に彼が偉大なる點にあらずや。今朝陽浴鶴圖と題するは、彼自らかく命名したる手簡の存するによりてなり。

文晁よく諸流を渾融し一派を開拓したりしかは、世に南北合派の名稱を附するもの多し。これまた一見識にして、本圖の如きは當時世に南宗畫と呼はれたる一派の筆致の妙を發揮し、賦彩も亦濃麗のこといふべし。然も日常筆にする所住々豪放磊落の筆致、墨痕淋漓たる北宗畫的の樣式を以てすること少なからざるなり。是れ文晁の修養廣濶にして且つ深潤なるを證すべく、畫界の奇傑すら猶決して易々こしてて、覇者たるの榮譽を擅にしたるものにあらざるを知るべし。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4



渡邊秀實筆　老少同歡圖

絹本　竪四尺七寸　横一尺九寸一分

Painting of Autumn Flowers.　By Hidezane Watanabe.
(1778–1830)

小杉德君藏

近世の日本繪畫史に於て、長崎の地は、頗る重要なる地位を占め、漢畫研究の爲め笈を負ひて、遠くこの地に遊び、遂に盛名を天下に擅にしたるもの少なからず、この流を稱して一に長崎派といふ、然れども祖先以來この地にありて、世々丹青の道にたづさはり、崎陽の畫壇に貢獻したるものを、渡邊氏とす、即ち渡邊氏の畫風の變化はやがて長崎派の變化と見るを得べきなり、今秀實を說かんには其の畫系を述ぶるをよしとす。

渡邊氏の祖を秀石といふ、明僧逸然に學び、遂に深く宋人の妙趣を得て一家をなし、元祿十年創置せられたる唐繪目利の職に舉げられ、子孫多くこの職に傳へられたる宋元の畫風を措いて、更に直接漢畫を學びたるものなりと雖、猶北宗の亞流たるを免れず、秀石の後秀朴、秀岳、元周、秀溪等相繼ぎて家業を墜さざりしが、享保年中別途の畫風支那より入りて崎陽の畫壇に一大波瀾を起し、中にも沈南蘋の畫風最勢力を得て、こゝに長崎派の特長最も顯著となるに至れり、然も秀溪の如きは宋人の法を得、嘗て沈南蘋の爲めに、孔子氏も亦其の流を汲むに至り、秀溪の後秀彩秀詮を經て秀實に至れり、是を以て秀實の畫風の沈氏の流によれるいふ、この後南長の畫風甚だ盛んにして、渡邊關羽二像を畫きて贈りしに、南蘋歎賞措かず、書を贈りて謝せしこと次第を知るべし。

秀實は字を元成といひ、鶴洲と號す、秀詮の子にして、幼より畫を父及び眞村蘆江に學び、夙に出藍の譽あり、人物花卉鳥獸山水に至るまで善くせざるなく、寫生を巧にし、傳彩の術に長ず、筆力峭勁、誠に當代の高手と稱せられたり、人となり剛毅方正、姑息に安ぜず、書畫に臨んでは神を凝らし氣を通じ、敢て輕々しく一手を施さざりしといふ、享和二年父の後を嗣いで唐繪目利の職となる、後天保元年庚寅九月歿す時に年五十三、秀實文筆の才あり、長崎畫人傳を著はし、長崎派の畫系を明かにす、後に荒木一の續長崎畫人傳ありて其の後を補ふ、長崎畫人の今日に知らるゝは實に秀實の編著あるによる、老少同歡圖は以て秀實の畫風を窺ふに足るべく、其の寫生的技能の秀でたるを見るべし、贅に嘉慶二十一年とあるによりて、我が文化十三年秀實三十九歳の作と見ることを得ん、小杉氏は土井侯重臣にして世々家老の職にあり、畫も贅も共に謹みて、小杉氏の爲めに作る所といふ。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

渡邊華山筆　瑞鹿圖

紙本　竪三尺八寸五分　横一尺六寸七分

Painting of Deers.　By Kwazan Watanabe.
(1793—1841)

岡部長君藏

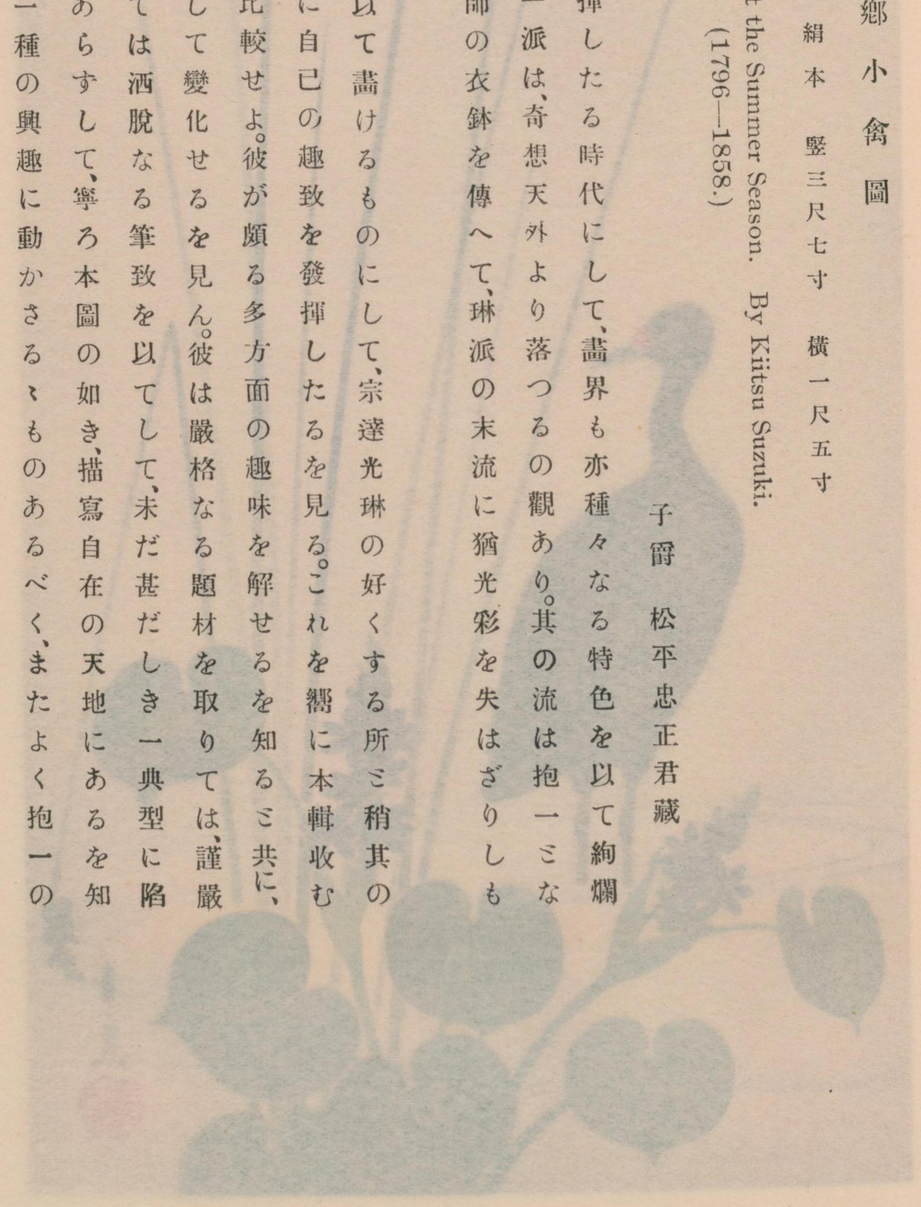
瑞鹿圖は華山作畫中逸品の一に數ふべきものにして、天保二年辛卯十一月武州大麻生古澤氏に寓して作る所なり。

そも三宅侯の舊領は武州三尻村にありしが、慶長七年三州田原に移封せられしなり。豫てより侯は藩の系譜を作らんことする希望を有せしが、文政十二年に至り、華山に命じて三宅家の家譜を編輯せしむ。華山も亦夙にこの志あり、大に喜び乃ち武州の舊領に至り久しく滯留して調査に從事せり、而して隣村大麻生の素封家古澤氏と相識るに至れり。古澤氏は博學多識の士にして、兼ねて俳句を能くし、華山と意氣相投じ、其の交殊に深ければ、華山は屢古澤氏を訪ひ、已れの宿坊たりし龍泉寺よりは、反つて多く古澤氏に宿泊せりといふ。かくの如くなりければ華山即ちこの圖を贈りて以て謝意を表せるなりといふ。然るに明治維新の後古澤氏家政整理に際し緣故により て、福井藩の國老たりし岡部家に讓與せられたるなり。

華山の畫技に卓越せることは、茲に贅言を費すの必要を見ずと雖、この瑞鹿圖の如き正に三十九歲の作にして、洒脫せる落筆、餘人の併馳を許さざるものあり、生氣畫面に横溢し、よく華山其の人の面目を躍如たらしむ。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

瑞鹿圖
辛卯十有一月作於大麻生古澤氏家蓼山登



鈴木其一筆　水鄕小禽圖

絹本　竪三尺七寸　横一尺五寸

Painting of a Water Fowl at the Summer Season.　By Kiitsu Suzuki.
(1796—1858.)

子爵　松平忠正君藏

德川時代は日本獨特の文明を發揮したる時代にして、畫界も亦種々なる特色を以て絢爛の美を競へり。内にも宗達光琳の一派は、奇想天外より落つるの觀あり。其の流は抱一ニなり、以て其一に及べり。其一はよく師の衣鉢を傳へて、琳派の末流に猶光彩を失はざりしもの、ごいふべし。

本圖は彼が最も瀟洒たる筆致を以て畫けるものにして、宗達光琳の好くする所ニ稍其の趣を異にし、抱一に學び來つて更に自己の趣致を發揮したるを見る。これを鄰に本輯收むる所の濃麗莊重なる猩々舞圖ニ比較せよ。彼が頗る多方面の趣味を解せるを知るニ共に、技巧またよく畫圖の表現に適應して變化せるを見ん。彼は嚴格なる題材を取りては、謹嚴に筆を下し、瀟洒なる構圖にありては洒脫なる筆致を以てして、未だ甚だしき一典型に陷らざるなり。然も彼が特技は彼にあらずして、寧ろ本圖の如き、描寫自在の天地にあるを知らん。今兩者を比較し來れば、また一種の興趣に動かさるゝものあるべく、またよく抱一の筆意を繼ぎて、師名を辱めざりしを賞揚すべきにあらずや。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

岡本秋暉筆　雪中南天圖

紙本　竪九寸五分　横一尺八分

Painting of the Nandin in the Snow.　By Shuki Okamoto.

(1784—1861)

須藤傳次郎君藏

岡本秋暉は祐之丞と稱し、晩に秋翁と云へり。幼より丹青の道を好み、始め圭齋の門に入りて、山水人物を專らとせんとせしが、小田原侯の藩臣に列するの故を以て、俗事多忙にして、人物の故實有職を考究するの暇なく、又山水の勝景奇蹟を擅に遊覽することも能はざるを以て、玆に自家研究の方針を確立し、專ら花鳥を題材として其の眞を寫さんと欲し、或は華山に師事し、或は明清諸大家の畫蹟を參酌し、汲々として精勵し、自家獨創の構圖を作り、用筆の練磨にも亦深き熱誠を籠めければ、遂に一新機軸を出すに至り、花鳥畫の大家となれり。されば細密なる寫生畫に於ては、よく花卉蟲禽の眞を寫し、其の妙趣を發揮し得たり。且つ筆力超越したりければ、特に草畫に妙を得たり。故に謹嚴周密の畫は正に彼が日常の修養を披瀝して、餘人に卓越したるとと共に、輕々に筆を下したる草畫に於ても、亦輕妙逸脫の趣に富み、彼が超凡の畫技を有したるを知る。

本圖は畫帖中の一圖にして、靈妙の落筆賞するに足るべく、徒に筆を弄することなく、自然の風趣を表現し得たりしは、沒骨法に於ける寫生畫として、眞に上乘のものと稱すべし、また近世に於ける巨匠として、畫壇の一角に重をなすに足るべし。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

岡本一抱画帖　雪中南天図

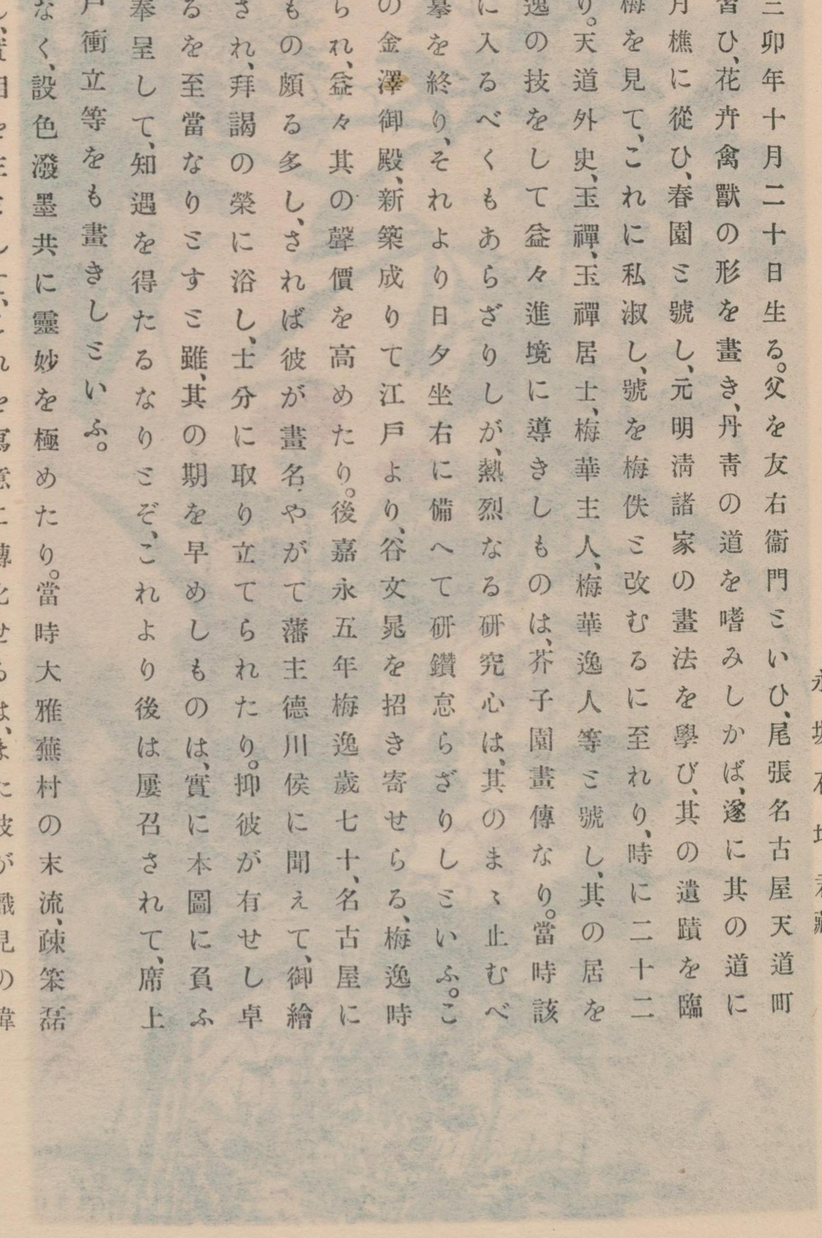
国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

山本梅逸筆　四季草花圖

絹本　竪三尺五寸五分　横一尺二寸七分

Painting of Flowers of the Four Seasons.
By Baiyetsu Yamamoto.
(1783—1856)

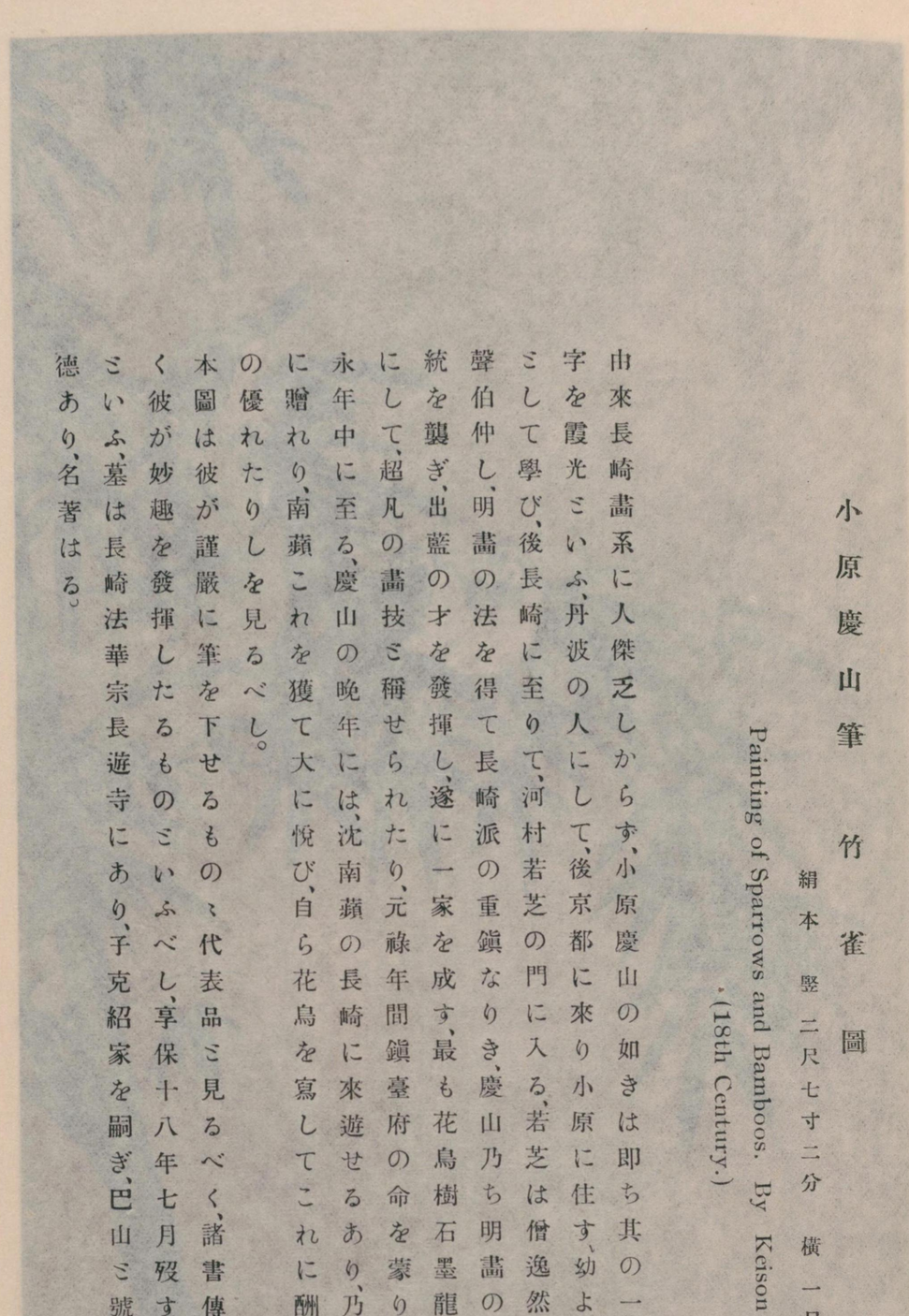
永坂石埭君藏



梅逸名は親亮、字は明卿、幼名を卯年吉こいふ。天明三卯年十月二十日生る。父を友右衞門こいひ、尾張名古屋天道町に住みて彫刻師たり。卯年吉幼より父の家業を見習ひ、花卉禽獸の形を畫き、丹青の道を嗜みしかば、遂に其の道に志し、初め山田宮常に學び、又山本蘭亭に就き、後張月樵に從ひ、春園こ號し、元明清諸家の畫法を學び、其の遺蹟を臨摹學習して、南宗の筆格墨法を悟り、又王元章の墨梅を見て、これに私淑し、號を梅佚こ改むるに至れり、時に二十二歳なりしこいふ。中年以後、佚字を改めて逸こ書せり。天道外史、玉禪、玉禪居士、梅華主人、梅華逸人等こ號し、其の居を友竹艸店、白梅居、樂是幽居等こも稱せり。而して梅逸の技をして益々進境に導きしものは、芥子園畫傳なり。當時該船來日尚淺かりしかば、價貴くして貧生の手に入るべくもあらざりしが、熱烈なる研究心は、其のまゝ止むべきにあらず。書肆に請ひ、借り受けて、一夜の內に臨摹を終り、それより日夕坐右に備へて研鑽怠らざりしこいふ。こに京都に在り、亦出でゝ殿內の襖全部を描かしめられ、益々其の聲價を高めたり。後嘉永五年梅逸歳七十、名古屋に歸住し猶筆硯に從事せり、遠近傳聞し揮毫を請ふもの頗る多し、さればや彼が畫名やがて藩主德川侯に聞えて、御繪格に進められ、御用人支配こなりて、帶刀を許され、拜謁の榮に浴し、士分に取り立てられたり。抑彼が有せし卓拔なる技倆を以てしては、正にかゝる恩典に浴するを至當なりこすこ雖、其の期を早めしものは、實に本圖に負ふ揮毫をなしこ傳へらる。即ち彼はこの雙幅を藩侯に奉呈して、知遇を得たるなりこぞ、これより後は屢召されて、席上梅逸は構想奔溢、筆端縱橫に飛動し、毫も澁滯の痕なく、設色潑墨共に靈妙を極めたり。當時大雅蕉村の末流、疎筆磊落の筆を弄し、以て氣韻高雅を得たりこするに對し、實相を主こして、これを寫意に轉化せるは、また彼が識見の偉なるを見るべし。かくて安政三年正月二日、梅逸は己が死期を豫知せしものか、遽に知己を招き、身に白衣を纏ひて、心經を讀みけるが、今日はこの世の別をなすこいひ終りて、溘然冥目せりこいふ。行年七十有四、名古屋伊勢山町洞仙寺に葬る。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4



小原慶山筆　竹雀圖

絹本　竪二尺七寸二分　横一尺二寸五分

Painting of Sparrows and Bamboos. By Keison Kohara.

(18th Century.)

男爵　都筑馨六君藏

由來長崎畵系に人傑乏しからず、小原慶山の如きは即ち其の一なり、慶山は初め溪山と號し字を霞光といふ、丹波の人にして、後京都に來り小原に住す、幼より繪畵を好み、曾我蛇足を師として學び、後長崎に至りて、河村若芝の門に入る、若芝は僧逸然の門に遊びて、渡邊秀石と名聲伯仲し、明畵の法を得て長崎派の重鎭なりき、慶山乃ち明畵の精細なる筆致を喜び、其の傳統を襲ぎ、出藍の才を發揮し、遂に一家を成す、最も花鳥樹石墨龍墨梅等に長じ、其の用筆豪放にして、超凡の畵技と稱せられたり、元祿年間鎭臺府の命を蒙り、御用繪師兼繪目利となり、寶永年中に至る、慶山の晩年には、沈南蘋の長崎に來遊せるあり、乃ち慶山墨龍を畵き以て沈氏に贈れり、南蘋これを獲て大に悅び、自ら花鳥を寫してこれに酬ひたりといふ、以て彼の技能の優れたりしを見るべし。

本圖は彼が謹嚴に筆を下せるもの、代表品と見るべく、諸書傳ふるが如く豪放の體なく、よく彼が妙趣を發揮したるものといふべし、享保十八年七月歿す、法名を霞光院慶山日登居士といふ、墓は長崎法華宗長遊寺にあり、子克紹家を嗣ぎ、巴山と號し、家法を學ぶ、門人に石崎元德あり、名著はる。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

小原慶山筆　竹雀圖

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

岡本秋暉筆　四季花鳥圖

絹本　竪四尺四寸三分　横一尺三寸三分

Painting of Flowers and Birds in the Four Seasons. By Shuki Okamoto.

(1784–1861).

藤懸靜也君藏

秋暉は小田原の人にして、世々藩主大久保侯に仕ふ。幼より丹青の道を樂み、初め鵜形圭齋に學び、後ち渡邊華山に從ひ、畵技大に進む寫生を主ゝして花鳥に嶄然ゝして頭角を現はし、椿椿山ゝ共に稱揚せられたり。本圖は四季花鳥を一圖に按配したるものにして、優麗逸美の趣致に富み、梅花芙蓉川骨を寫して、紅葉せる蔦をこの間に纏繞せしめ、よく布置經營の妙を盡し、敢て吾人に不自然の感を與へしめざるは、誠に嘆賞に値すべし、これ安政二乙卯七十二歲の時の筆にして、老錬暢逸の筆致は、誰かかゝる頽齡者の手に成れるものゝ思はん、以て彼が技倆の卓絶せるを知るべし。

秋暉の逸事に就きては、忽諸に付し能はざるものあり。即ち師華山の國事の爲めに捕へらるゝや、秋暉大に驚き、愴惶馳せて師を尋ねしに、既に網輿の中にあり、吏に就きて對面を求むれども許されず、聲を放つて號泣し、網輿に尾して東海道を下る、時々輿夫に告ぐるに其の意を以てす。川崎驛に於て、一老輿夫深く秋暉の志に感じ、間を窺ひ密に引て師ゝ對面せしむ、秋暉感極まつて涙下る、華山また秋暉の至情に泣き、將來を勵まして別る。實に秋暉はかくの如く師の恩義に感じ、情義の熱烈なるものあり。其の作る所他に卓絶し、一家の風格を拓き得たるまた緣由する所あるを知るべし。而して秋暉の念頭、終生師を忘るゝこゝ能はざりき、下總古河に、嘗て華山が蘭學の師ゝして仰ぎし鷹見泉石あり、秋暉乃ち古河に遊び、先師を追懷して泉石ゝ懇談せしゝいふ。本圖は即ちこの期に際し、特に同藩の士藤懸氏の爲に作る所にして、これに依るも以て筆者の風格高きを想見し得べし。秋暉は文久元年九月を以て歿す。年七十八。

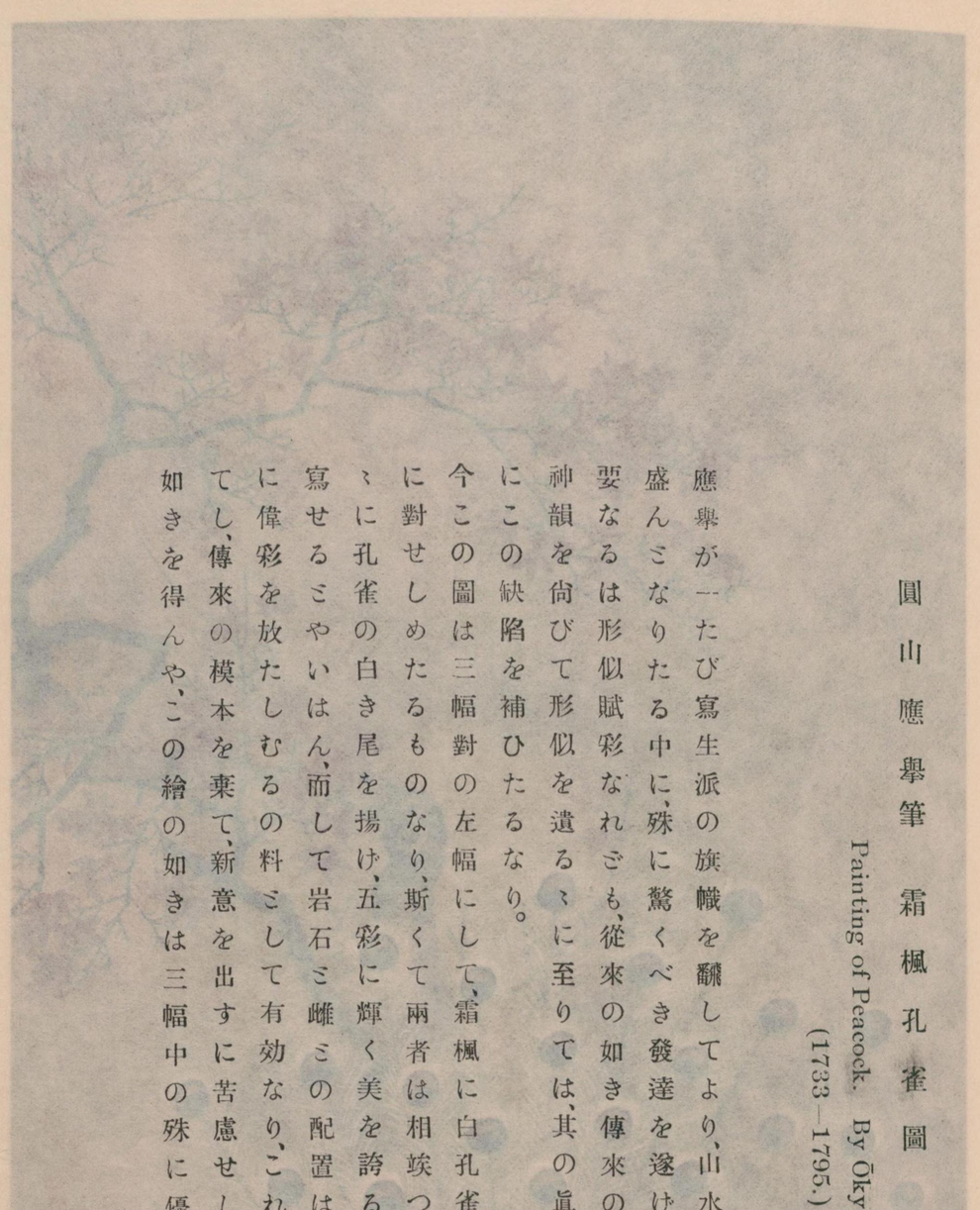
国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

圖本狀細雀　四季花鳥圖

Painting of Flowers and Birds in the Four Seasons. Ink Sketch Okamoto.

(1784-1901)

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4



圓山應擧筆　霜楓孔雀圖

Painting of Peacock. By Ōkyo Maruyama.
(1733—1795.)

男爵　澁澤榮一君藏

應擧が一たび寫生派の旗幟を飜してより、山水花鳥の何れにも其の眞を寫すこと盛んこなりたる中に、殊に驚くべき發達を遂げたるは花鳥畫なり、花鳥畫に特に必要なるは形似賦彩なれごも、從來の如き傳來の模本を以て金科玉條こ崇め、徒らに神韻を尙びて形似を遺るゝに至りては、其の眞を寫し得ざる亦當然なり、應擧は正にこの缺陷を補ひたるなり。

今この圖は三幅對の左幅にして、霜楓に白孔雀を配したるは、右幅の櫻花孔雀の圖に對せしめたるものなり、斯くて兩者は相竢つて、愈々其の美を誘致發揮し、心のまゝに孔雀の白き尾を揚げ、五彩に輝く美を誇るが如きは、誠によく鳥の心を解して寫せるこやいはん、而して岩石こ雌この配置は、霜に飽きたる楓こ共に、益々白孔雀に偉彩を放たしむるの料こして有効なり、これ實に形似賦彩に周密なる用意を以てし、傳來の模本を棄て、新意を出すに苦慮せし人にあらずんば、如何ぞよくかくの如きを得んや、この繪の如きは三幅中の殊に優れたるものこ稱すべし。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

森寬齋筆　四時清娯圖

"Autumnal Glory," one of the Characteristics of Four Seasons. By Kwansai Mori. (1813-1894)

鹿島精一君藏

森寬齋は養父徹山に就きて畫法を學び、四條風の畫に長ず、抑四條派にありては、骨法用筆の技を重んじ、局部の描寫頗る緻密なるものあり、玆に示す四幅對四時清娯の一なる紅葉の圖の如きは、蓋其の標本的のものと稱するを得べく、深紅に染められたる紅葉、既に散りにし枝の樣などよく天然の情趣を寫し得て妙なり、實に彩色設色の精を致せるものにして、この派の特技と稱するを得ん、寬齋頗る勤王の志に厚く王事に盡せり、談會々皇室の事に及べば、常に襟を正ふして涙潸然たりしこそ、

明治二十七年六月二日歿す年八十二。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

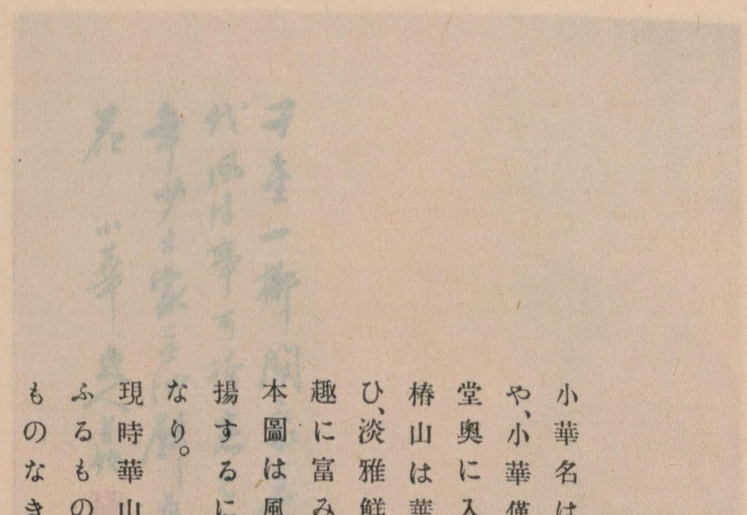
国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

渡邊小華筆　牡丹圖

絹本　竪四尺　横一尺三寸

Painting of Flowers of the Tree-peony.　By Shokwa Watanabe.

(1835—1887)



山本安三郎君藏

小華名は諧、字は韶卿、渡邊華山の二男なり。天保六年に生る。其の時華山年正に四十三、華山の自盡する や、小華僅に七歳なりしかば、椿山これを指導し訓育甚だ努む、實に小華は椿山の力によりて畫技の 堂奥に入れり。

椿山は華山門下の秀才なり、而して惲南田、張秋谷に私淑し、また好んで王忘庵の風を學び、沒骨法を用ひ、淡雅鮮麗にして、渲染明艶一點の覇氣を存せず、華山の如き雄拔の氣に缺くる所あるも、優雅溫麗の趣に富み、高遠なる韻致を求め、近世南宗の泰斗なり。小華はよく其の畫風を承く。

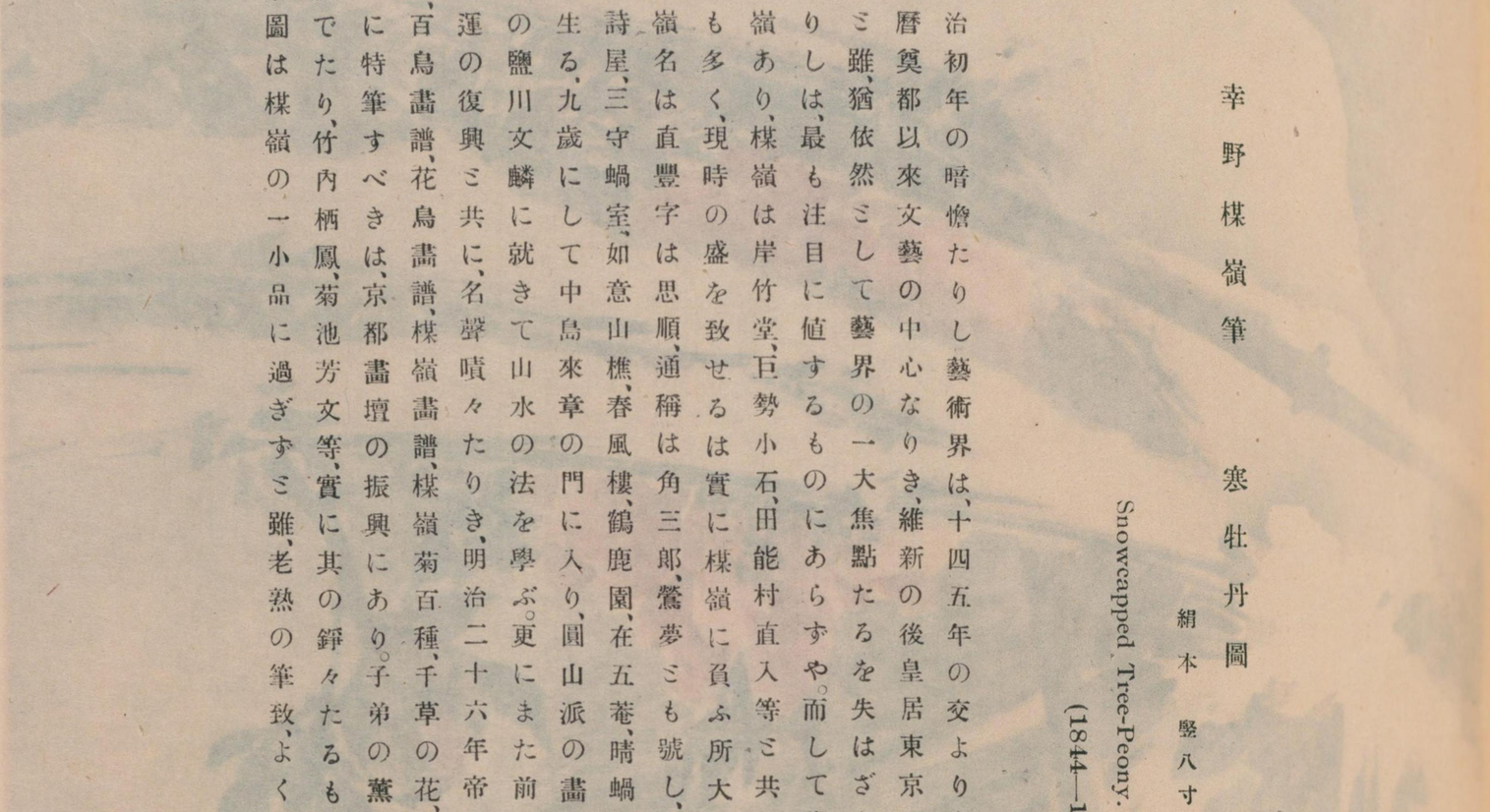
本圖は風前の牡丹を畫きて、よく其の姿態を寫し、且つ風韻を失はず、飜々として風に吹かるゝの狀、賞揚するに足るべく、其の沒骨法の如き椿山に髣髴たるものあり。小華の畫技に至りては敢て侮り難き なり。

現時華山の眞蹟として傳はれるものに、往々小華の畫けるものを混入せり。或は僞作を敢てせりと傳 ふるものあるも、多くは小華の款識を削りて華山の款と變へたるなりといふ。往々一見識別に苦しむ ものなきにあらず、以て其の技倆の一端を窺ふに足るべし。小華の世にあるや、時正に維新の變革に會 ひ、頗る窮乏を極めたりといふ。明治二十年十二月歿す。年五十三。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

411
43

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4



幸野楳嶺筆　寒牡丹圖

絹本　竪八寸六分　横一尺一寸五分

Snowcapped Tree-Peony.　By Bailei Kōno.

(1844—1895)

笹川臨風君藏

明治初年の暗憺たりし藝術界は、十四五年の交より漸く曙光を認めて、文藝復興の運に向ひぬ。京都は延暦奠都以來文藝の中心なりき、維新の後皇居東京に遷され諸般の事物萎靡せるもの少なからざりしと雖、猶依然として藝界の一大焦點たるを失はざりき。明治十三年七月、京都府立畫學校の開設を見たりしは、最も注目に値するものにあらずや。而して當時この校の教授の一椅子に倚りしものに幸野楳嶺あり、楳嶺は岸竹堂、巨勢小石、田能村直入等と共に、京都畫壇振興に熱血を濺ぎたるの人、然も勳勞最も多く、現時の盛を致せるは實に楳嶺に負ふ所大なりしなり。

楳嶺名は直豐字は思順、通稱は角三郎、鷲夢と號し、別に長安堂、青龍館、六柳北圃、金仙茶寮、香雲深處、無聲詩屋、三守蝸室、如意山樵、春風樓、鶴鹿園、在五菴、晴蝸禪房、雪廼家等の諸號あり、弘化元年三月三日京都に生る、九歲にして中島來章の門に入り、圓山派の畫法を修むること二十年、更に師の許諾を得て、四條派の畫川文麟に就きて山水の法を學ぶ。更にまた前田暢堂、中西耕石等の文人畫家に交り、技益々進み、明治二十六年帝室技藝員に擧げられ、二十八年歿す、年五十二、著すところ百鳥畫譜、花鳥畫譜、楳嶺畫譜、楳嶺菊百種、千草の花、亥中の月、工業圖式、毛筆畫帖等あり。然も楳嶺の爲に所、百鳥畫譜、花鳥畫譜、楳嶺畫譜、楳嶺菊百種、千草の花、亥中の月、工業圖式、毛筆畫帖等あり。然も楳嶺の門に特筆すべきは、京都畫壇の振興にあり。子弟の薫陶にあり、現時の京都畫壇の大家多く楳嶺の門に出でたり、竹內栖鳳、菊池芳文等、實に其の錚々たるものなり。

本圖は楳嶺の一小品に過ぎずと雖、老熟の筆致、よく彼が眞面目を語るものにあらずや。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

司馬江漢筆海濱圖

Painting of Sea-shore. By Kōkan Shiba.

(1747—1818)

清野長太郎君藏

司馬江漢、名は峻、字は君嶽、不言道人又は春波樓と號す。通稱を安藤吉次郎といふ。夙に漢學の素養あり、乃ち名を那樣に擬して司馬江漢と稱せり。延享四年生る。西洋窮理の學に志すこと深く、其の學の精細にして實用的なるを喜び、天文曆數の學を研究し長崎に遊ぶ。

畫は彼の餘技とする處、然かも幼より之れを好み、其の技大に觀るべきものあり。或は狩野古信に就いて學べりと傳ふれども明かならず。和畫を以て俗なりと貶し、宋柴石の畫法を習ふ。明和七年浮世繪師の大家鈴木春信の歿するや、江漢之れが作に擬して畫くも、人能く眞贋を辨じ難かりしといふ。畫才の豐かなる之れによつても推知し得べし。然も其の修むる所頗る廣く、美人を畫くに明の周臣、仇英等の設色に學ぶ處多かりしといふ。長崎に貧笈の折洋畫の法を習ひ、之れを本邦の畫に應用して大に得る所あり。遂に一家の風を成して、天明三年九月に至りて銅版の風景畫を刊行す。先是、豐春の一派は、洋畫の遠近法を參酌して成れる新樣式の浮繪なるものを作りしが、玆に於てか江漢の新樣行はれて、風景畫の樣式に一大變革を生ぜり。此の特技は著しく世に歡迎せられ、急激の進歩を遂げて、浮世繪界に大なる影響を及ぼし、清長、歌麿、榮之、豐國等の美人畫にも、其の背景に之れを巧に應用するに至れり。寛政の末年には浮繪は一頓挫を生ぜしも、江漢が當時の畫界に與へたる功蓋し少なからざるなり。

江漢の著す所、銅版天球圖、同地球圖、同風景畫、同瀕海圖、和蘭通舶、和蘭奇巧、春波樓畫譜、東都八景圖、靈鷲山圖說等の著あり。晩年に及び自ら肖像を畫いて題詠を畫けり、曰く「江漢が年がよつたで死ぬるなり、浮世に遺す浮繪一枚」と。文政元年十月、享年七十二歲を以て歿す。門下に亞歐堂田善あり、油繪を畫き、又銅版を刊行せり。

此の圖款識に1799と記す。即ち歿年に先立つこと十九年の作なり。構圖賦彩共に西洋畫の感化著しく、然かも或る程度までは巧に彼我の技巧を融會し得たるを見るべし

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

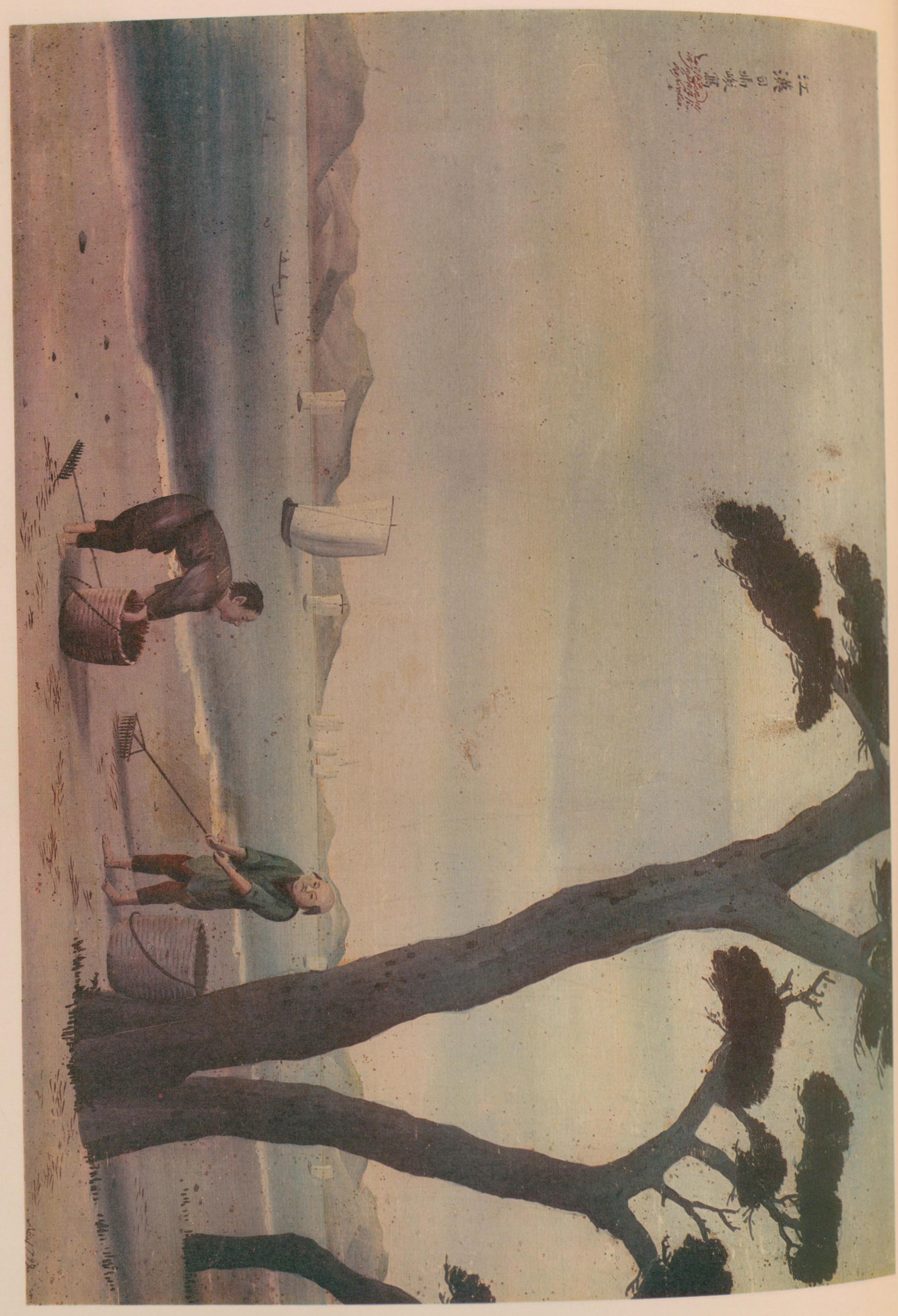


圖 洛 華 森 江 雷 同

Painting of Sse-ssoo. By Kopsun Sinpo.
(1717–1811)

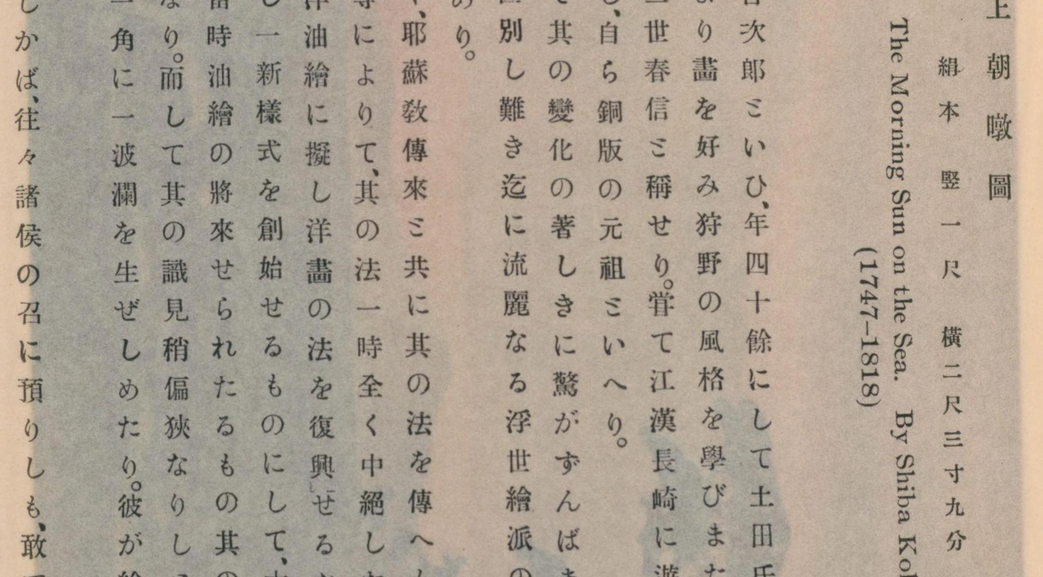
41
43

司馬江漢筆　海上朝暾圖

絹本　竪一尺　横二尺三寸九分

The Morning Sun on the Sea.　By Shiba Kokan.

(1747–1818)



石田五六郎君藏

司馬江漢名は峻、字は君岳、通稱を安藤吉次郎といひ、年四十餘にして土田氏に入夫す。不言道人西洋道人また春波樓等の別號あり。延享四年に生る。幼より畫を好み狩野の風格を學びまた宋紫石に畫法を問ひ、鈴木春信の門にも入りて春重と號し、師の歿後には二世春信と稱せり。嘗て江漢長崎に遊び、蘭語を研究し、洋畫の法を修む。江戸に歸りて、後專ら油繪銅版畫に從事し、自ら銅版の元祖といへり。

今江漢の畫風を見るに頗る多樣にして其の變化の著しきに驚がずんばあらず。或は南宗畫によれるあり、或は狩野風を帶べるあり、或は鈴木春信と區別し難き迄に流麗なる浮世繪派の美人を寫したるものあれど、然も江漢の最大特色は洋畫を中興したるにあり。

抑我國に於ける洋畫の起源は頗る古く、耶蘇教傳來と共に其の法を傳へしものにして、德川初期には頗る多く行はれしが、島原亂後、異教の嚴禁、鎖國等によりて、其の法一時全く中絶したりしなり。然るに茲に司馬江漢を俟つて、始めて密陀油に繪具を溶きて、西洋油繪に擬し洋畫の法を復興せるなり。

即ちこの畫風は西洋畫に東洋畫を混し一新樣式を創始せるものにして、本圖の如きはその標本的のものといふべく、彼が特色を發揮せるものなり。當時油繪の將來せられたるもの其の數少なかりしに、よくかくの如き手法を創意したりしは特筆大書すべきなり。而して其の識見稍偏狹なりしと雖、尋常畫家と其の趣を異にし、極端なる寫實主義を主張し、當時の畫界の一角に一波瀾を生ぜしめたり。彼が繪畫に對する思想は春波樓筆記によりて窺ふことを得。

江漢既に畫家として名聲都鄙に聞えしかば、往々諸侯の召に預りしも、敢て其の聘に應せず、悠々山水を樂しみ、四方に漫遊し、名山勝川を探りて畫囊を豐にせり。かくて文政元年十月歿す。享年七十二。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

田崎草雲筆　浪擢岳陽樓圖

絹本　横一尺八寸七分　竪四尺三寸六分

Landscape.　By Soun Tazaki.　(1815–1898).

羽生順吉君藏

田崎草雲名は芸諱は明義通稱を恒太郎といひ、初め梅溪と號し後字草雲を以て畫名とす。白石子、後樂生、三白翁、硯田農夫、蓮岱山人、知不知齋、顧自棄齋、半甘生、玄圃生、鐵面生等の諸號あり。畫屋は初め梅溪畫屋と榜し、又七里香草堂と扁し、更に白石山房と稱す。もと下野足利藩の卒族たり、父恒藏は金井烏洲に學び翠雲と號し、草雲も亦烏洲に從ふ。後加藤梅翁の家僕となりて畫技を勵み依て梅溪と稱し、又谷文晁の門をも叩き、後專ら春木南溟に師事せり。然れども猶これを以て足れりとせず、元明清諸大家の筆蹟に學びて遂に其の特技を大成するに至れり。仇十洲の回錦圖卷、錢滄洲の人物畫卷、劉松年の畫錦堂圖卷、盛茂燁の山水圖等は特に草雲に刺擊を與へて啓發せしめたる處多しと謂ふ。

草雲は尋常丹青の徒にあらず。天資剛厲にして、王事に盡すの念篤く、明治維新の大業成らんとするの日、佐幕の論盛んなるの間に立ちて、勤王の士を率ゐ、誠心隊の名は著しく、殊に剛勇と奇智とを以て能く兵馬倥傯の間に處したるは、特に欵賞に値する處なり。　今上陛下深く其功を思召され、大正四年十一月十日從五位を追贈せられたり。草雲の生涯は實に崎嶇羊腸の嶮路たりき。幼にして繼母の兒と相容れずして家を去るの不幸に遭ひ、流浪艱難具に世故の辛苦を嘗め、長じて娶るに及ぶや、其の婦貞良にして勉めて倦まず、幸に後顧の憂なからしめたりと雖ども、不羈狷介なる草雲は其の彩筆を俗衆の需によつて弄することなきを以て、米鹽の料常に乏し。然かも氏の畫名未だ高からざるに、二十有一年の久しき苦勞を共にしたる糟糠の妻は、難症のために夫に先立て逝き、尚ほ後年に至りては、其の嗣格太郎は、婦と共に夙に伏するの悲運に會せり。晩年畫名漸く高く、聲譽世に高きに至りしと雖ども、氏が生涯を追想すれば感慨禁じ能はざるものあり。草雲此の間に處して尚ほ毅然として其の守る處を失はず、性來酒を嗜みて悠々たる天地を壺中に求めり。白石山房の閑棲、僅かに氏が前半生の嶮路を忘るゝに足れり。氏が作品の淡雅にして然かも力あるは、氏が境遇と性格との產物として當然なりとす。

本圖は草雲の作品中、精描の部類に屬すべきものにして、濃彩を施し、樹石樓閣波浪飛禽皆寫實に基き、然かも其の間に筆致の味ふべきあり。勇健の態以て氏の特色を見るに足れり。今款識によつて明治六癸酉の歲草雲正に五十九歲の筆なるを知る。當時は畫運最も衰頹せるの時なり。然も悠々としてかゝる丹青の巧を盡せるは、實に世を超絕したる逸士草雲の如きにあらざれば、焉んぞよく斯くの如くなるを得んや。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』 請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

土佐光起筆　貝盡圖

絹本　竪八寸二分　横一尺二寸

Painting of the Shell-Fishes.

By Mitsuoki Tosa. (1617—1691.)

東京美術學校藏

抑日本繪畫の古來よりの大流を原ぬるに、北宗南宗の如き、中世に於ける支那系統の畫派にはあらず、假へ其の源を上世の韓畫と唐畫とに發すと雖、全く日本化して、我國獨特の樣式をなしたる大和繪をこそ擧ぐべけれ。藤原鎌倉時代は實に大和繪の最盛期なりしが、足利の世に、宋元の畫風榮ゆるに及びて、在來の純日本的樣式は新興の漢畫派に壓倒せられぬ、桃山時代より、江戸時代の初に、また日本趣味の復興を見、存續殆ど測り知り難かりし土佐派は茲に一大發展を遂ぐるに至れり。これ實に光起の努力によれるなり。

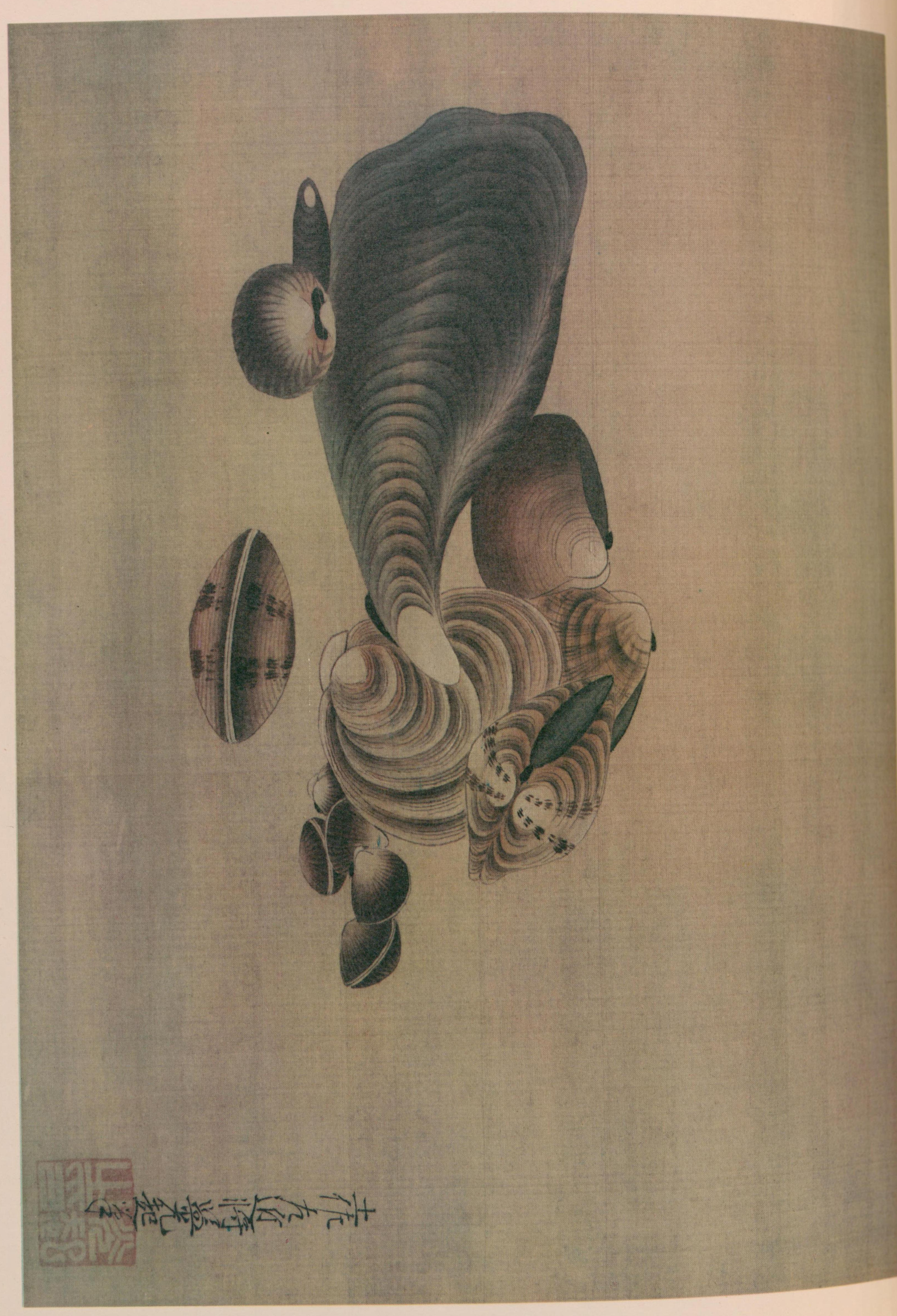
光起は元和三年に生れ、寛永中二十二歳にして父を喪ひ、祖父光吉の門人戸田光純に畫道を學び、畫て、寶體描寫の妙を發揮したるものといふべく、また彼が特技として稱揚するに足るべし。

和繪とは、流風相同じからず、頗る典型的の弊に陷りし所あるも、寫實に精にして、花卉翎毛より、魚鱗蟲介の微に至るまで、一一窮盡せざるなし。貝盡圖の如きは、尺方の小幀中によく精緻巧麗の筆を以

惟ふに光起は土佐家再興の傑物なりと雖、漢畫派の影響を蒙ること甚大にして、藤原鎌倉時代の大せられゝの盛運を見、後剃髮して常昭と稱し、法眼に叙せられ、元祿四年歿せり、時に年七十五。

に光起は元和三年に生れ、寛永中二十二歳にして父を喪ひ、祖父光吉の門人戸田光純に畫道を學び、畫名漸く高く、從五位下左近衞將監に叙せられ、また繪所預となり、一旦絶えたりし土佐の繪所は再興

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4



国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

宮崎友禪齋筆　壽老騎鹿圖

絹本　竪二尺三寸五分　横六寸五分

Painting of Jurojin.　By Yuzensai Miyasaki.
(18th Century)

清野長太郎君藏

友禪齋は宮崎氏、また單に友禪ともいふ、京都の人なり。光琳の畫風を學び、設色に妙を得、浮世繪にも巧にして、自ら一格を創始せり。天和より寶永間の人にして、落款には鳳城東友禪齋の號を用ひたり、蓋し京都鴨川の東、仁王門通に住みたればなるべし。世に傳ふる所によれば、京染と稱する美麗なる模樣を染出すことを工夫せしは友禪なりといふ故に友禪染の名ありと、女用鑑に曰はく、爰に友禪といふ浮世繪法師あり、一流を扇に書出せしかば、貴賤の男女喜悦の眉うるはしく、丹花の唇をほころばせり、是によりて衣服のひな形を作りて、吳服師に與へしと、又同書に花の丸盡しの模樣を友禪染といふことあり、以て友禪染の名稱、頗る古きを知るべし。惟ふに友禪齋は光琳風を善くしたれば、設色美麗にして、意匠も巧妙なりしなるべく、衣服の上繪なぞに妙を得、一度名聲を博してより、他のこれに摸するもの多く、遂に友禪模樣の名をして、天下に普ねからしむるに至りしなるべし。

友禪齋は生死の年月詳かならず、作品の世に傳ふるものも多からず、近世逸人畫史には、友禪齋筆鼠の娶入の圖ありといへり、一大松樹を寫し、枝葉の間より、倉庫の屋根又は牖戸なぞ隱見し、鼠の行列其牖戸を出入し、鼠の形狀精細分明にして、實に絶妙なりと、又元祿五年板、和歌物あらひ、寶永三年板、繪本祇園梶の葉は皆友禪齋の畫く所、板畫にも筆を染めしを知るべし。

本圖は彼がよく光琳の畫風を得たるを見ると共に、卷物、笠、杖等を肩にして鹿に乘れる態度、頗る飄逸の風に富むを認むべし。設色所謂友禪染の如き濃麗なるものにあらざるも、却つてこれ彼が眞面目を發揮したるものならん。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

酒井抱一筆風神圖

Painting of Vayu or Indian God of Wind. By Hōitsu Sakai.

(1761—1828.)

男爵　澁澤榮一君藏

風神は婆廋(Vayu)と稱する印度の神なり、古く吠陀(ヴエダ)時代に起り、次で波羅門教の神たりしが、後に佛教に入りしものにして、天然崇拜に基き、恐怖の觀念を具體化したるものなり、而して本圖の如く形狀をなせるもの、古く漢代に於て畫かれたりといへば、以て其の淵源する所遠きを知るべし。

この圖は風神雷神を畫ける二曲屏風一雙の一にして、抱一の私淑せる光琳も嘗てこの圖を畫きしことあり、其は世人一橋家(伯爵徳川達孝君藏)の風雷神と稱して光琳の傑作となすものなり、本圖は即ち抱一が其の畫によりて畫きたるものにして、圖樣全く相同じ、而して光琳の圖はまた彼の私淑せる俵屋宗達の圖(京都建仁寺藏)によりしものにして、三者殆んど異る所なく、何れも稀世の名畫となして世に推賞せらる、故にこの三者を比較賞鑒することが最も興味ありといふべし、宗達の筆は素朴にして畫致沈重、極彩色を施せるも、然かも風韻に富み、光琳は筆才餘りあるを以て、其の筆に成れる風雷神も婉曲洒脫の趣を存す、抱一は乃ち鮮妍濃麗なる賦彩を以てし、最も華美婉麗の趣を示せり、而してこの三者時代の相違あるを以て、畫面の古色に自ら異る所ありと雖、抱一は特に顔料の優良なるを撰みたるにより、時代も亦後れたるにより、彼の畫ける風雷神の圖は、賦彩最も鮮麗にして人目を奪はんことを努めたり、本圖は玆に精巧なる原色版によりて原畫の色彩を發現するに努めたり。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

41
43

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

酒井抱一筆　雷神圖

Painting of Indra or Indian God of Thunder. by Hōitsu Sakai.

(1760—1828.)

男爵　澁澤榮一君藏

雷神は風神こ同じく印度の神にして、Indra 或は Rudra こ稱するものに當り、Indra は又は暴風雨の神にして猛惡を意味し、Rudra は嚕陀羅こ稱しこれまた暴惡を意味す、風神こ共に古くより畫の題材に用ゐられたりこ雖、未だこの圖の如く有名なるはあらず。

今この風雷神の圖を賞鑑せんには特に光琳この關係を知らざるべからず、抱一は最も光琳の畫風を愛し慕倚措かず、其遺風を發揚せんことをこれ努め、文化十二年光琳百年忌に當りては、同好の士を招きて各々法橋の畫幅を携へ來らしめ、これを模寫して光琳百圖二册を刊行し、且つ光悅宗達以下斯派各畫家の印譜を輯めて一册こなし、尾形流略印譜こ題してこれを同好に頒ち、更に文政九年の光琳忌には光琳百圖續篇二册を上梓し、また光琳及び弟乾山の墳墓をも修理せり、かくの如きは抱一が光琳に私淑せるの餘り其流風を廣く世に傳へんが爲めにして、風雷神の圖を光琳筆其まゝに模寫したるは毫も怪むべきにあらず、而してこの圖の優秀卓越の傑作なるは贅言を要せず、更に注意すべきは屛風の裏面にして、風神の一隻には葛薄蔦等を畫き、疾風これを吹いて葛葉は飄々こし、蔦葉は飛散するの狀を寫し、雷神の一隻には女郎花白百合薄等の强雨に打たれ、野水の奔流するの樣を描き、以てよく風雷二神圖に對する氣分を現はすことを得たり、其の意匠の卓絶せる、表裏照應の妙を極めたる、抱一苦心の蹟を想見すべきなり、今德川家珍藏の光琳筆風雷神屛風の裏面を見るに、これまた抱一の靈腕を揮ひたるものにして、圖樣全く澁澤家のこ相同じく更に精緻を致したるものなり、風雷神は共に金地に極彩色に描かれたれご、澁澤家藏は裏面紙本にして德川家のは銀地なり、故に其の畫の表現方法相同じからず、銀地にありては極彩色にして群青綠青等を多量に使用し、著色艶麗を極むれご、紙本にありては沒骨法を用ゐる藍雌黃等を以て群青綠青等にかへたれば、淡彩にしてよく洒脫の趣を發揮せり、思ふに德川家珍藏の風雷神屛風裏面の圖の如きは、抱一が光琳の名作に接し慕倚措く能はず、表裏照映の妙を盡し、經營慘憺心血を注ぎて描きたるものにして、澁澤家藏の風雷神は正にこの時に模寫せられたるものこいふべく、裏面も亦同圖を稍簡にし以て一雙の屛風こなせるを知るべし、抑光琳こ抱一こは隔世の師弟なり、而して德川家のは二人の傑作を集め、澁澤家のは表裏共に抱一の心血を傾倒したるものにして、これに宗達筆を加へなば風雷神圖の三逸品こ稱すべく、我國の寶什こ謂べきなり。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

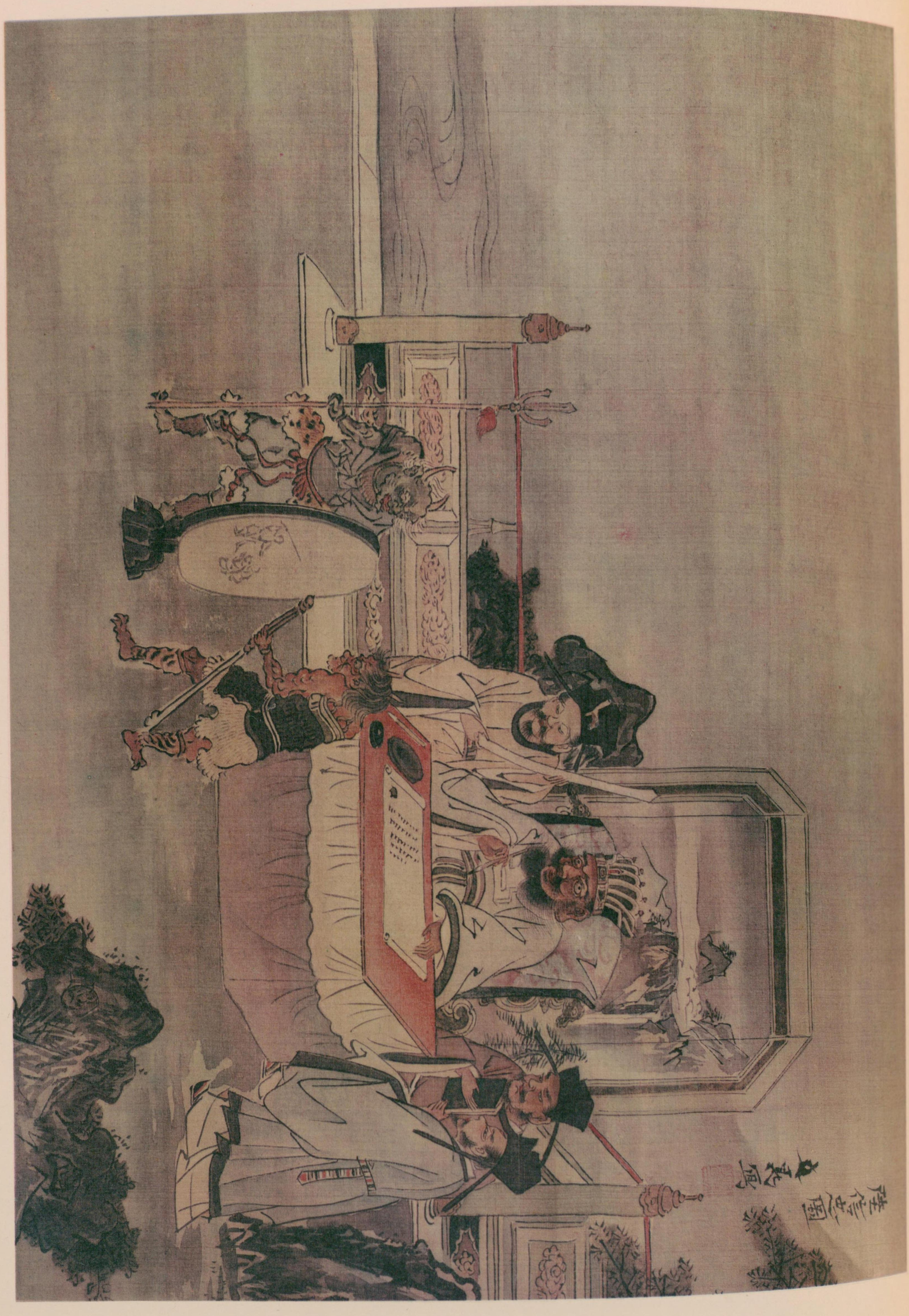
谷文晁筆　閻魔王圖

絹本　竪一尺三寸四分　横九寸七分

Painting of the King of Hades who Judges and Punishes the Departed Souls.
By Buncho Tani. (1763-1840).

安藝秀治君藏

江戸三百年の治世に、絢爛たる花を開きし文化文政の大御所時代は、眞に日本文化の粹を蒐め、文學美術蔚然として興隆せるなり、この間に立ちて、舊來の諸畫派を研究して、採長補短を行ひ、自己の偉才を以て、これを渾融して、清新なる一派を開き、江戸の丹青界に牛耳を執り、京の圓山四條派とよく拮抗したるものを谷文晁とす。文晁名は正安、文晁は其の字なり。通稱は文五郎といひ、一如居士、畫學齋、無二庵主、蜨叟等の別號あり。好んで富岳を寫せるを以てまた寫山樓とも稱せり。江戸の人にして、初め加藤文麗に就きて畫を學び、後渡邊玄對に從ひ、また鈴木芙蓉を師とす。而して更に宋元諸家の風格を學び、徒らに規倣を事とせず、自ら工夫發明する所ありて、揮灑縱横、筆端の動く所、立所に千山萬岳成り、雪烟浮動の妙、膏潤秀逸の趣に富み、龍攫虎撃の活劇も、目睫の間に描かれ、行く所として佳ならざるなく、豪宕奔放の筆、また味ふべし。而して一度思を潛めて畫けば、結構緊密、設色古雅秀麗にして、遙かに明人の壘を摩す。青綠山水然り、人物花禽また別個の風格あり。當時の畫壇に嶄然として頭角を見はしたるもの故なきにあらざるなる。文晁の如きは、實に近世畫界の最大偉人にして、三百年來江戸の藝術を渾然として一身に收めたるは、彼が偉大なる所以なり。本圖は陸信忠圖に倣へるものにして、未だ十分に彼が技倆を窺ふに足らずと雖、また以て其の一斗を知るべし、かくの如くなれは、文晁は畫技を以て、田安家に仕へ、また松平定信に寵用せられたり。定信の編纂にかゝる集古十種は即ち文晁が命を受けて畫けるものにして、其の他著はす所、本朝畫纂、畫學大全、日本名山圖會、書畫觀甲、歴代名畫譜、寫山樓畫本、松島眞圖等にして、何れも世に行はれたり。天保十一年十二月四日卒す、年七十八。義子文一山水花鳥を善くす、惜むらくは早世せり。實子文二また山水に長じ、家法を學ぶ、其の他兄弟姉妹妻女等深く心を繪事に留め、藝林に其の名を稱せられたり、盛事と謂つべし。



国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

41
43

呂文英筆賣貨郎圖

絹本　竪五尺二寸六分　横三尺

A Miscellaneous Goods-Seller.　By Robunei.
(15th Century)

東京美術學校藏

明代は即ち主權漢人に移りたる時代なるを以て漢族の文化發展顯著なるものありて、畵道また一層の興隆を見たり、されば元朝には畵院の設なかりしも、茲に再び趙宋の遺緒を紹ぎて、其の復興を見るに至れり、其の規模甚だ大なりとはいふべからざるも、歷代の帝王多く畵を好み大に斯道を奬勵せしかば、名匠巨擘彬々として畵院より輩出し其の盛、南宋のそれと競ふに至れり、呂文英の如きは即ち其の畵院に屬せる一人なりとす。

呂文英は括蒼の人孝宗の時、指揮同知を拜し仁智殿に直し畵名嘖々たり、孝宗畵を善くし恰も宋の徽宗高宗の畵に堪能にして奬勵到れる如く、弘治年間の畵院も亦よく保護奬勵せられて隆々俊秀蝟集の狀を呈せり、吳偉、呂紀、王諤、林時儋、張乾、鐘欽禮、沈政の如き皆有名にして何れも仁智殿に直し、呂文英は呂紀と並び稱せられ、小呂と呼ばれたり、特に人物を善くす、本集收むる所の賣貨郎の如き細巧緊密賦彩麗美、よく明代畵院の特長を發揮せるものといふべく、宋元諸家の如き、雄渾簡勁なる風韻に缺くる所あるも、畵風概して穩健にして、其の技巧は圓成の境に入り、設色精良、また明代畵道の一進歩と稱すべし。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

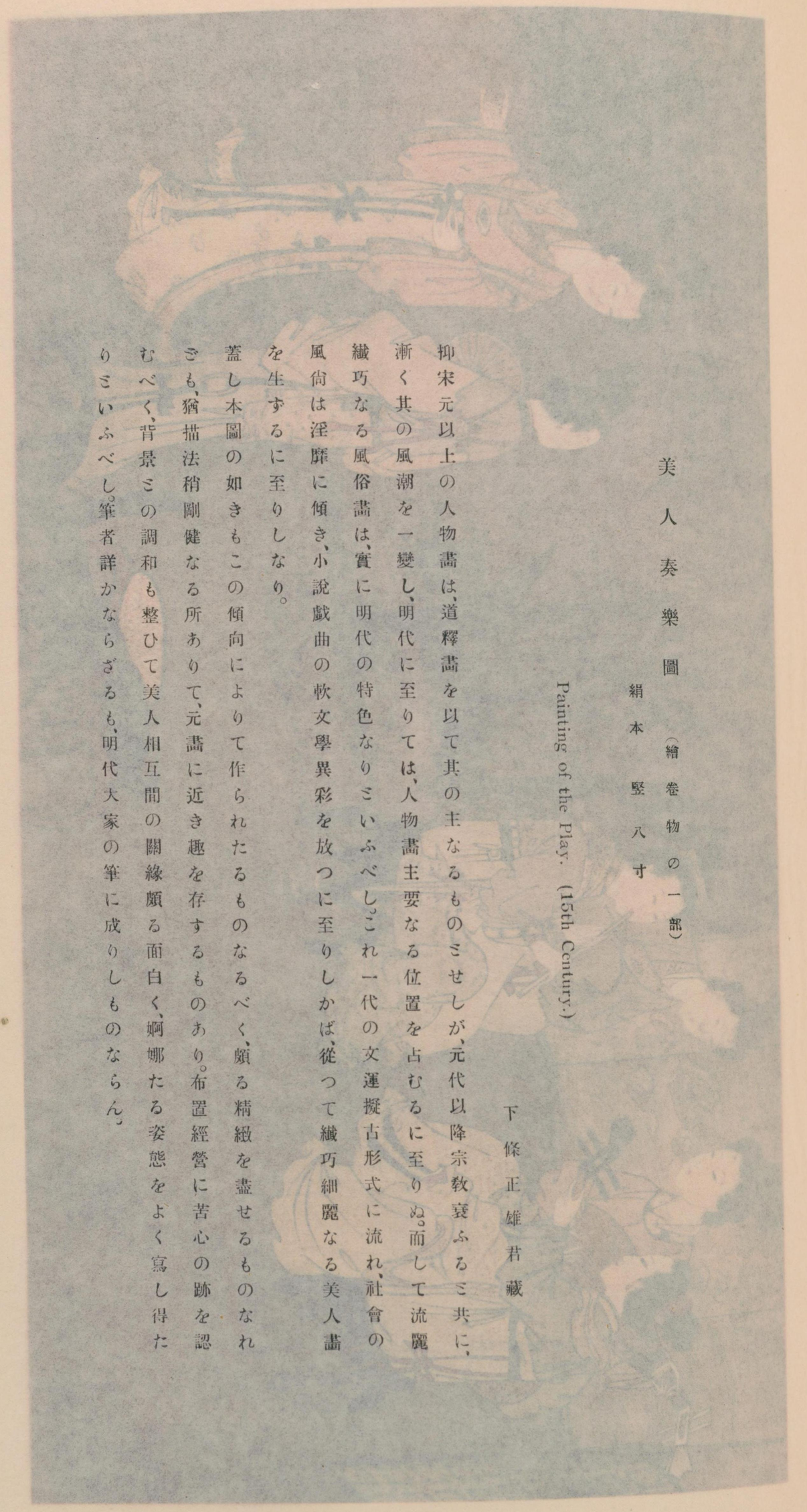
411
43

美人奏樂圖（繪巻物の一部）

絹本　竪八寸

Painting of the Play. (15th Century.)

下條正雄君藏



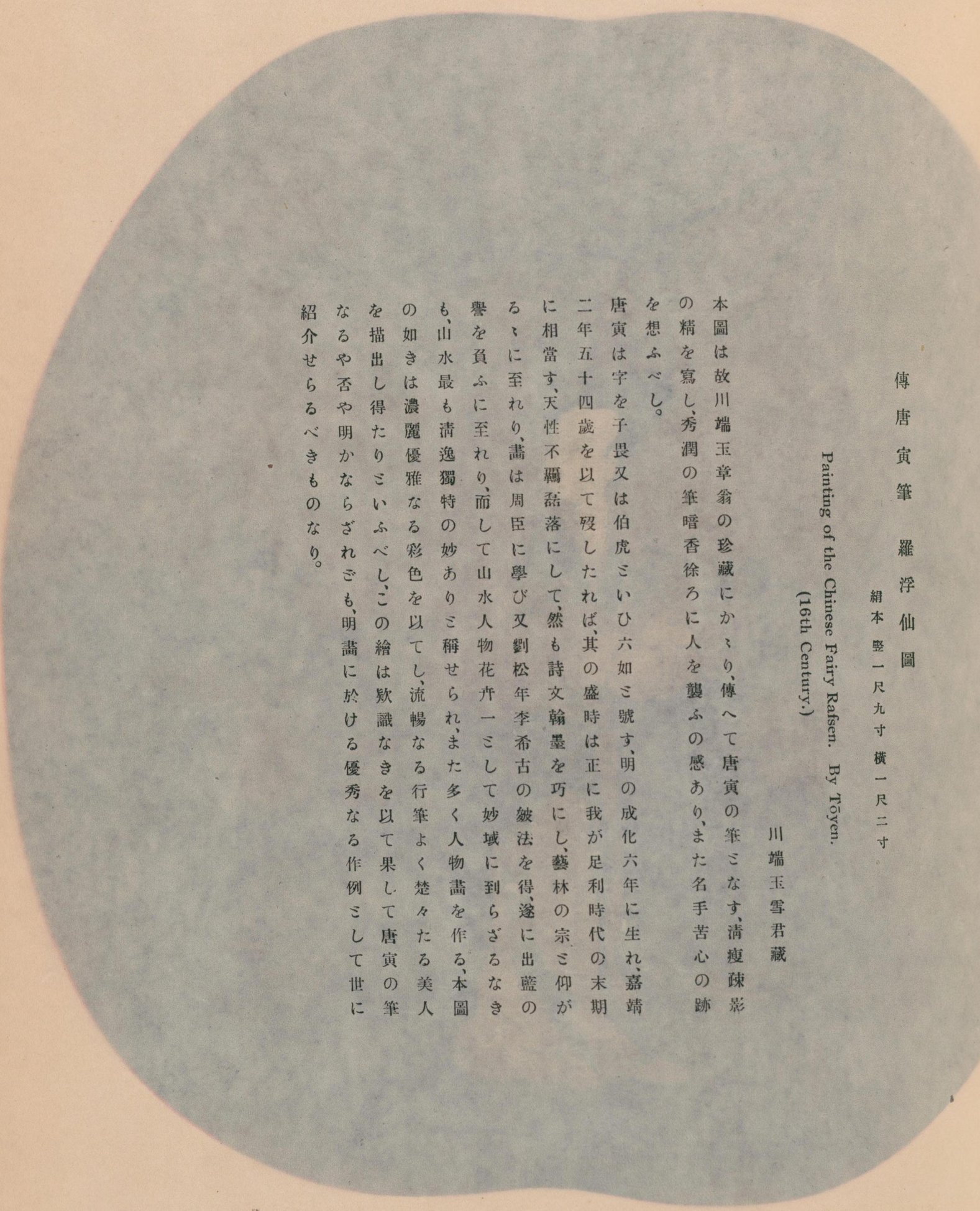
抑宋元以上の人物畫は、道釋畫を以て其の主なるものとせしが、元代以降宗教衰ふると共に、漸く其の風潮を一變し、明代に至りては、人物畫主要なる位置を占むるに至りぬ。而して流麗纖巧なる風俗畫は、實に明代の特色なりといふべし。これ一代の文運擬古形式に流れ、社會の風尙は淫靡に傾き、小說戲曲の軟文學異彩を放つに至りしかば、從つて纖巧細麗なる美人畫を生ずるに至りしなり。

蓋し本圖の如きもこの傾向によりて作られたるものなるべく、頗る精緻を盡せるものなれども、猶描法稍剛健なる所ありて、元畫に近き趣を存するものあり。布置經營に苦心の跡を認むべく、背景との調和も整ひて美人相互間の關緣頗る面白く、婀娜たる姿態をよく寫し得たりといふべし。筆者詳かならざるも、明代大家の筆に成りしものならん。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

411
43



傳唐寅筆　羅浮仙圖

絹本竪一尺九寸　横一尺二寸

Painting of the Chinese Fairy Rafsen. By Tōyen.
(16th Century.)

川端玉雪君藏

本圖は故川端玉章翁の珍藏にかゝり、傳へて唐寅の筆ニなす、清瘦疎影の精を寫し、秀潤の筆暗香徐ろに人を襲ふの感あり、また名手苦心の跡を想ふべし。

唐寅は字を子畏又は伯虎ニいひ六如ニ號す、明の成化六年に生れ、嘉靖二年五十四歳を以て歿したれば、其の盛時は正に我が足利時代の末期に相當す、天性不羈磊落にして、然も詩文翰墨を巧にし、藝林の宗ニ仰がるゝに至れり、畵は周臣に學び又劉松年李希古の皴法を得、遂に出藍の譽を負ふに至れり、而して山水人物花卉一ニして妙域に到らざるなきも、山水最も清逸獨特の妙ありニ稱せられ、また多く人物畵を作る、本圖の如きは濃麗優雅なる彩色を以てし、流暢なる行筆よく楚々たる美人を描出し得たりニいふべし、この繪は款識なきを以て果して唐寅の筆なるや否や明かならざれごも、明畵に於ける優秀なる作例ニして世に紹介せらるべきものなり。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

411
43

圖一百九十七　羅漢寅崖筆　仙谷圖

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

41
43

姜隱筆西王母圖

絹本　竪五尺四寸　横二尺九寸

Painting of Seiōbo. (A Chinese Tradition.)
By Kioin. (16 Century.)

東京美術學校藏

人物畫は明代に至りて著しき變化をなし、宋元時代の道釋畫は元朝以來の文化下向によりて、流麗細巧なる風俗人物畫となり、かの有名なる仇英出づるに及び、明代人物畫の師範と仰がれ、この流風當時の畫苑を風靡するに至れり。本圖の如きは實にこの傾向の下に現はれたるものといふべく、以て明代風俗畫の趨勢を知るに足るべし。

本圖は古來有名なる畫幅にして、或は姜道隱の筆と傳へられしことありと雖、彼は五代の人、其の筆者にあらざることは明かにして、姜隱の款識あるに關らず誤傳せるもの如し。姜隱字は周佐、山東黄縣の人、畫史彙傳には、人物士女花果を善くし、細潤古法を得、構景蕭疎、寄情凝遠、時に能品と稱すと云へり。此圖は穆王西王母に謁する所にして、桃花紅艷を競ひ、綠竹佳石其の所を得、清眸豐頰、美容を擅にして、神采風丰、人間界裡のものにあらざるを思はしむ、意趣超凡、畫品亦高雅、洵に明代名家の趣致を鑑賞するに足るべく、雄渾秀拔なりし道釋畫と對比せば、其の變化の顯著なるものあると共に、また別個の畫趣に誘致せらるゝものあるべし。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

41
43

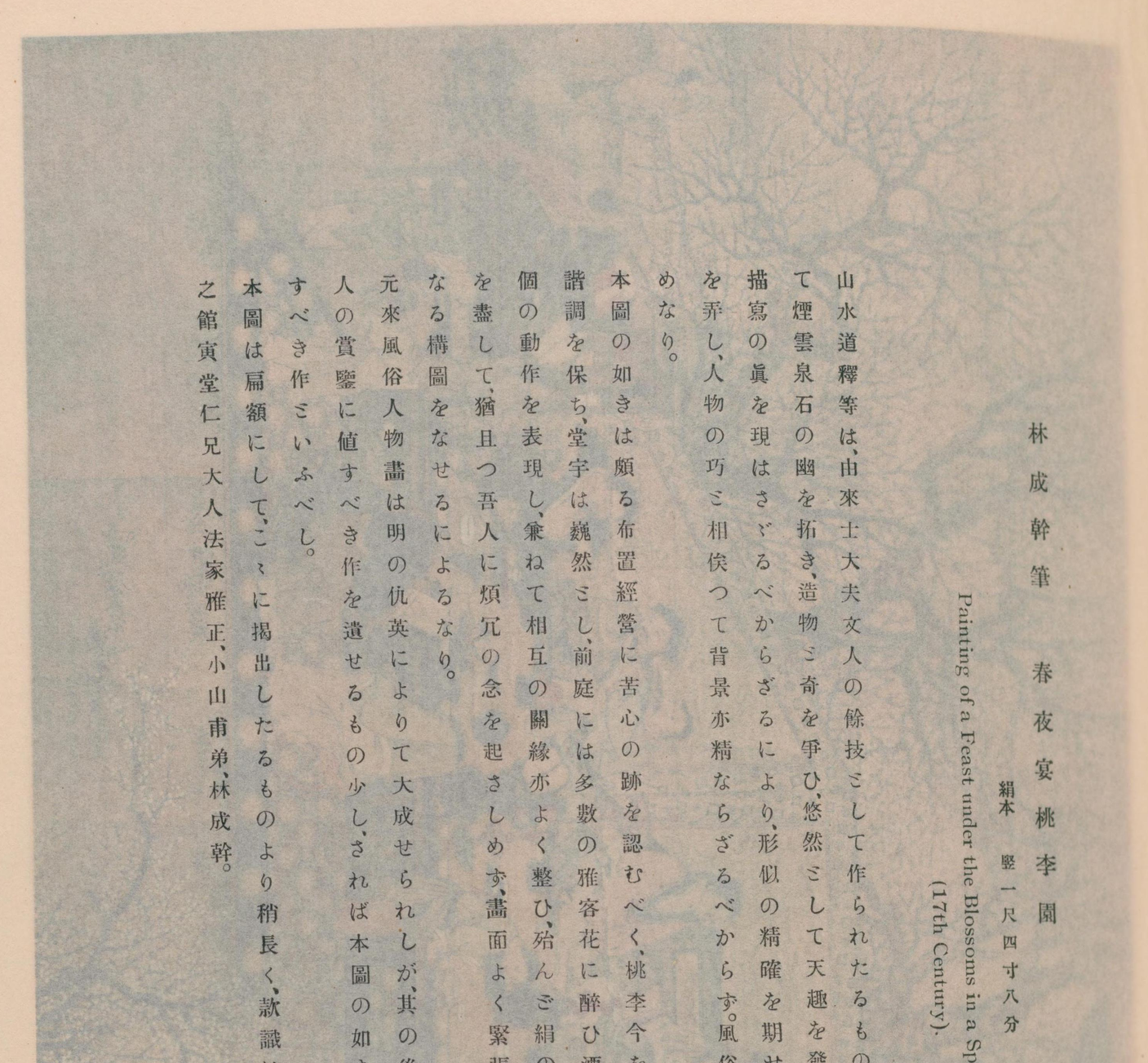
国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

411
43

林成幹筆　春夜宴桃李園

絹本　竪一尺四寸八分　横二尺三寸

Painting of a Feast under the Blossoms in a Spring Night. By Linseikan. (17th Century).



安藝秀治君藏

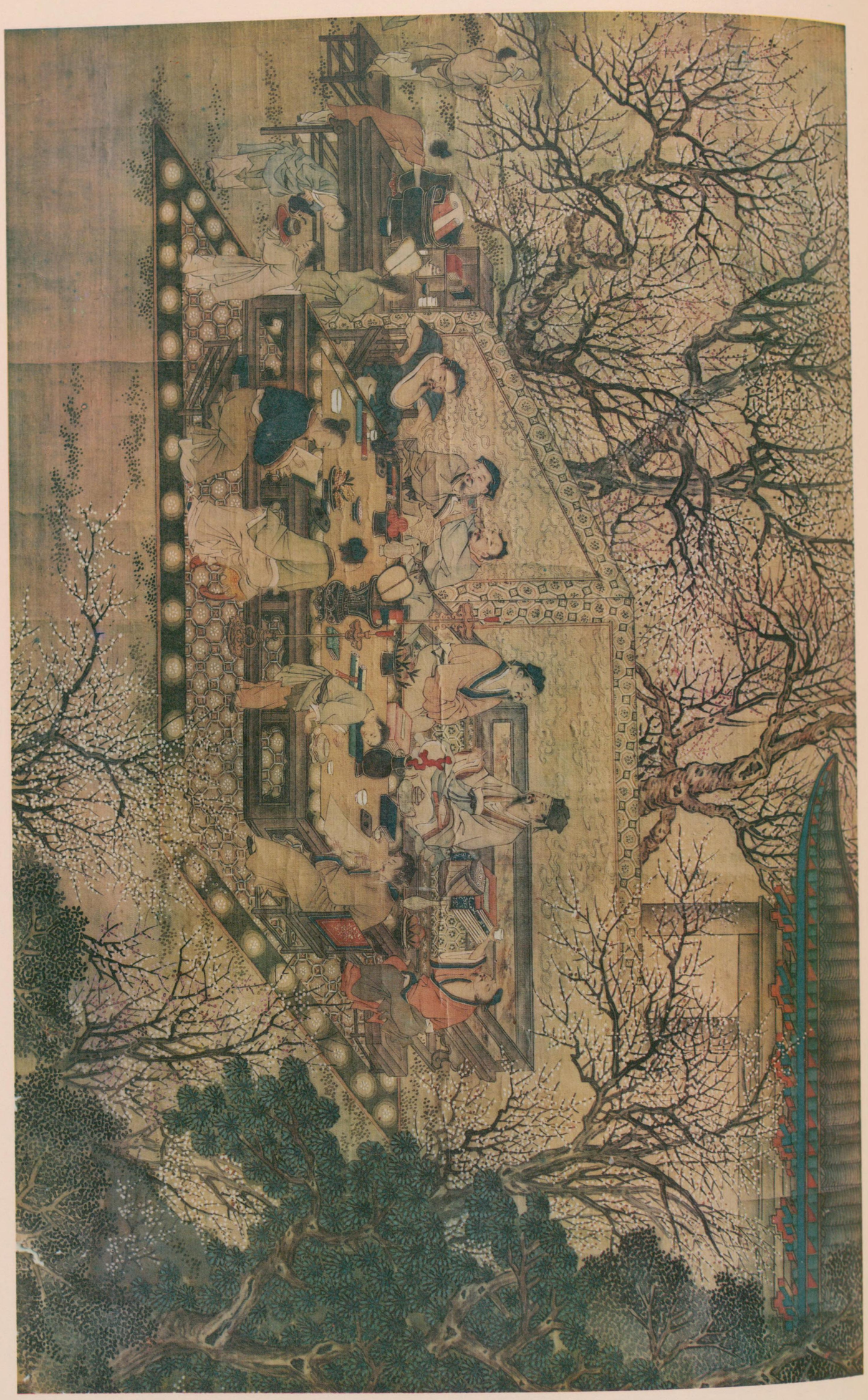
山水道釋等は、由來士大夫文人の餘技として作られたるもの多く、殊に山水畫に至りては、筆墨の靈を以て煙雲泉石の幽を拓き、造物と奇を爭ひ、悠然として天趣を發揮したりしが、風俗人物畫にありては、もと描寫の眞を現はさゞるべからざるにより、形似の精確を期せざるべからず、故に風俗畫は細巧精緻の筆を弄し、人物の巧と相俟つて背景亦精ならざるべからず。風俗畫に巧緻を極めたるもの多きはこれが爲めなり。

本圖の如きは頗る布置經營に苦心の跡を認むべく、桃李今を盛と咲き亂れ、綠樹この間にありて、色彩の諧調を保ち、堂宇は巍然として、前庭には多數の雅客花に醉ひ酒を汲み、悠々自適の境にあるが如し。よく個個の動作を表現し、兼ねて相互の關緣亦よく整ひ、殆んど絹の素地を餘さゞるまでに筆を下し、濃麗巧緻を盡して、猶且つ吾人に煩冗の念を起さしめず、畫面よく緊張して冗漫の憾なきは、これ本圖の頗る優秀なる構圖をなせるによるなり。

元來風俗人物畫は明の仇英によりて大成せられしが、其の後特に傑出せるものなく、明清の間に於て、吾人の賞鑒に値すべき作を遺せるもの少し、されば本圖の如きは支那近代に於ける風俗畫中の注目に値すべき作といふべし。

本圖は扁額にして、こゝに掲出したるものより稍長く、款識は次の如し。戊午季冬作於花含月吐茶半香初之館寅堂仁兄大人法家雅正、小山甫弟、林成幹。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4



411
43

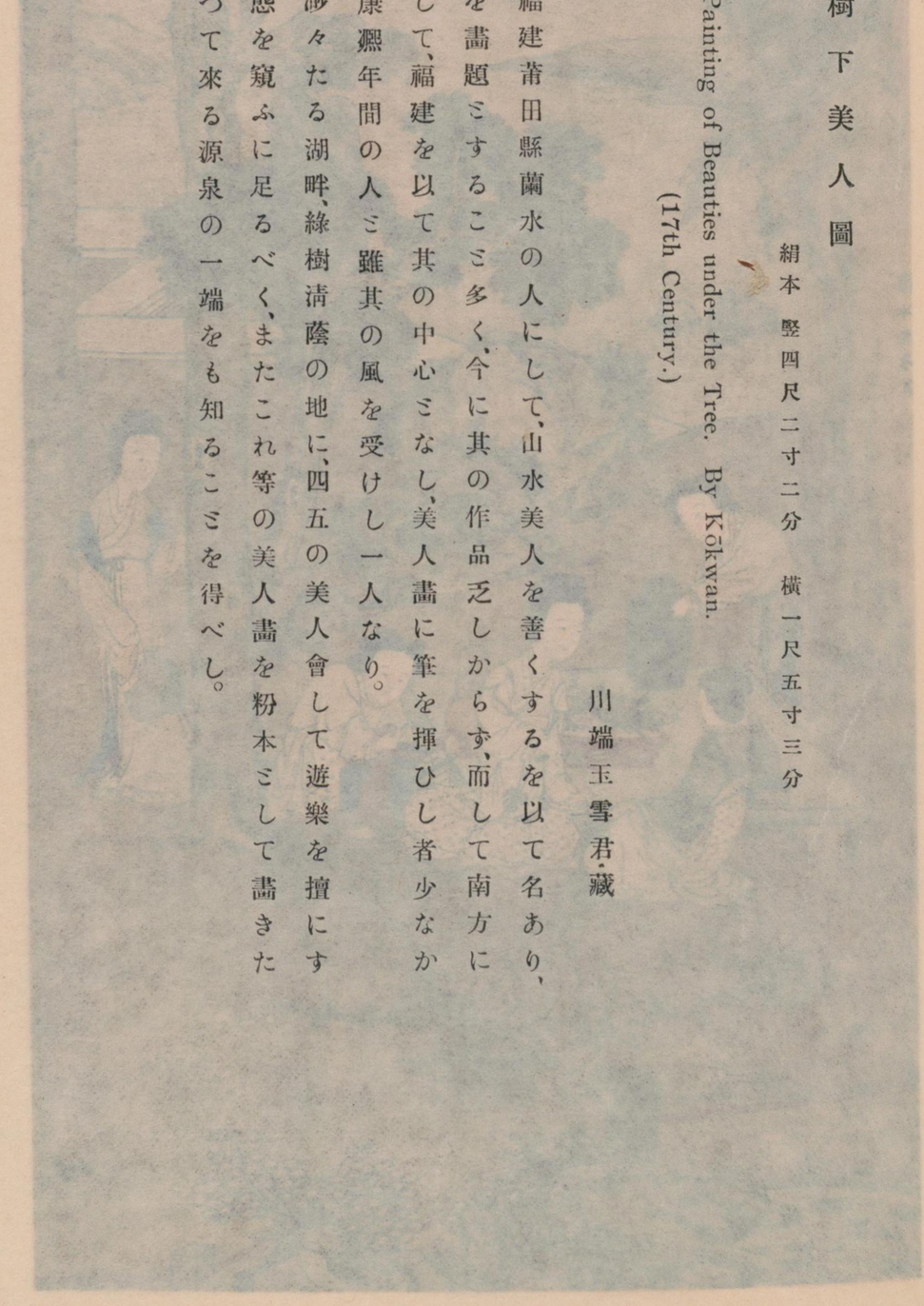
国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

411
43

黄巻筆樹下美人圖

絹本　竪四尺二寸二分　横一尺五寸三分

Painting of Beauties under the Tree. By Kōkwan.
(17th Century.)



川端玉雪君藏

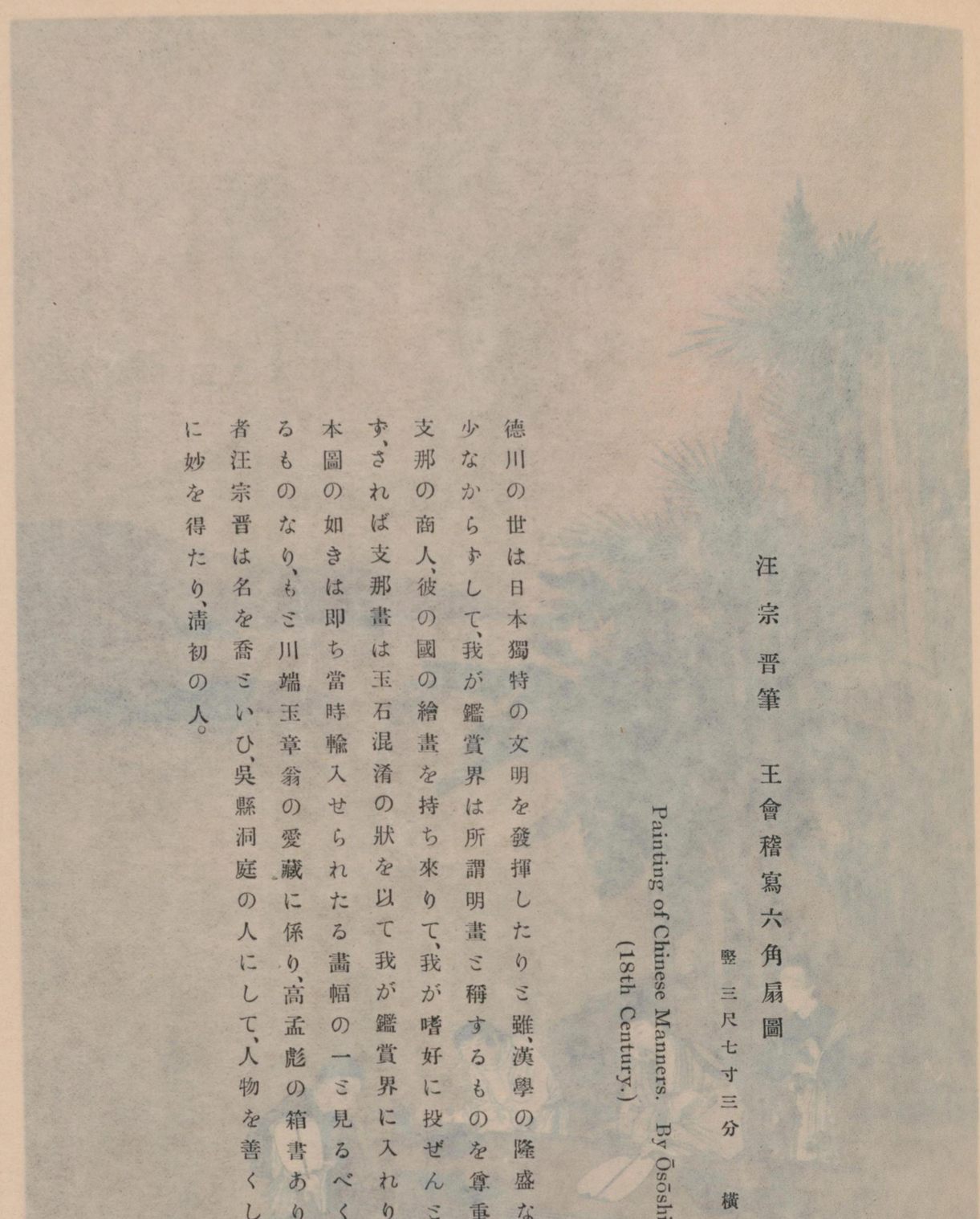
黄巻は字を聖謨といひ、福建莆田縣蘭水の人にして、山水美人を善くするを以て名あり、抑も明代に於ては美人を畵題とすること多く、今に其の作品乏しからず、而して南方に於てはこの流風盛んにして、福建を以て其の中心となし、美人畵に筆を揮ひし者少なからず、黄巻の如きは清の康熙年間の人と雖其の風を受けし一人なり。

今この圖を見るに、烟波渺々たる湖畔、綠樹清蔭の地に、四五の美人會して遊樂を擅にする所、支那南方の生活狀態を窺ふに足るべく、またこれ等の美人畵を粉本として畵きたる徳川期の唐美人のよつて來る源泉の一端をも知ることを得べし。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

411
43

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4



汪宗晋筆　王會稽寫六角扇圖

竪 三尺七寸三分　横一尺八寸五分

Painting of Chinese Manners. By Ōsōshin.
(18th Century.)

川端玉雪君藏

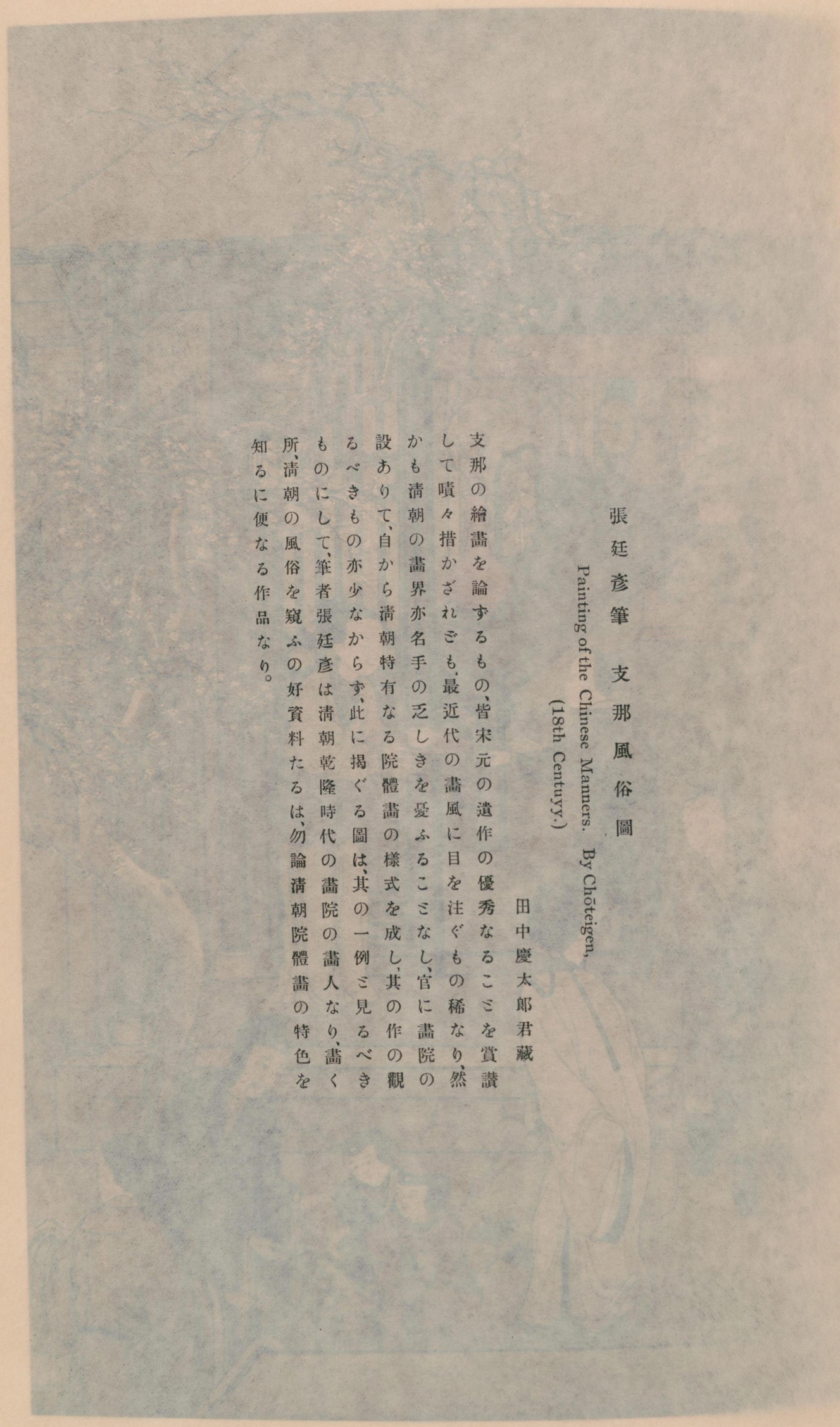
德川の世は日本獨特の文明を發揮したりと雖、漢學の隆盛なると共に、支那の影響も少なからずして、我が鑑賞界は所謂明畫と稱するものを尊重せり、されば利にさとき支那の商人、彼の國の繪畫を持ち來りて、我が嗜好に投ぜんとしたること偶然にあらず、されば支那畫は玉石混淆の狀を以て我が鑑賞界に入れり。

本圖の如きは即ち當時輸入せられたる畫幅の一と見るべく、而して其の玉に相當するものなり、もと川端玉章翁の愛藏に係り、高孟彪の箱書あり、また珍とするに足る、筆者汪宗晋は名を喬といひ、吳縣洞庭の人にして、人物を善くし、兼ねて花卉の類を寫すに妙を得たり、清初の人。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

411
43



張廷彦筆　支那風俗圖

Painting of the Chinese Manners. By Chōteigen,
(18th Centuyy.)

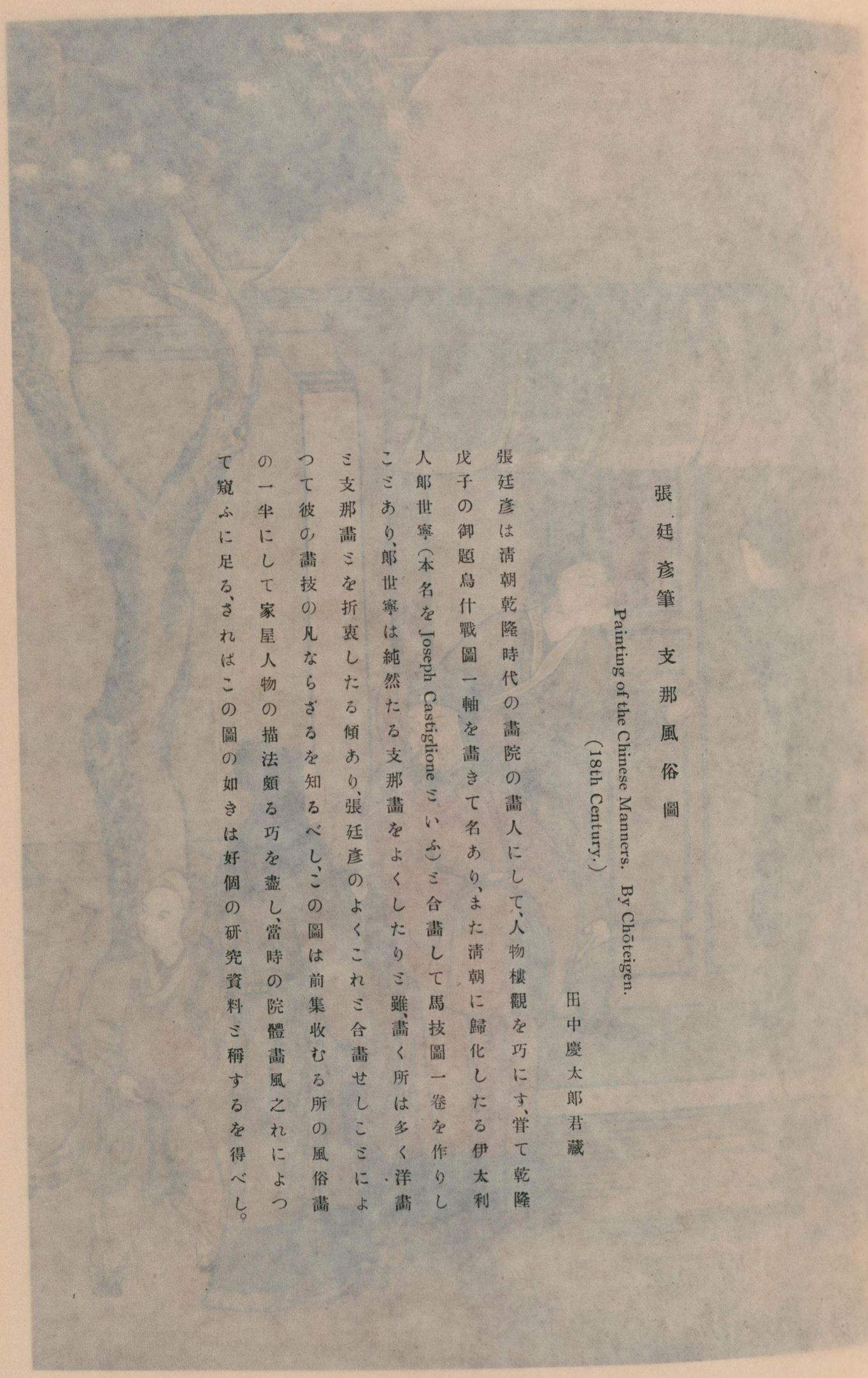
田中慶太郎君藏

支那の繪畫を論ずるもの、皆宋元の遺作の優秀なるこゝを賞讃して嘖々措かざれども、最近代の畫風に目を注ぐもの稀なり、然かも清朝の畫界亦名手の乏しきを憂ふるこゝなし、官に畫院の設ありて、自から清朝特有なる院體畫の樣式を成し、其の作の觀るべきもの亦少なからず、此に揭ぐる圖は、其の一例こ見るべきものにして、筆者張廷彦は清朝乾隆時代の畫院の畫人なり、畫く所、清朝の風俗を窺ふの好資料たるは、勿論清朝院體畫の特色を知るに便なる作品なり。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

411
43



張廷彦筆　支那風俗圖

Painting of the Chinese Manners.　By Chōteigen.
(18th Century.)

田中慶太郎君藏

張廷彦は清朝乾隆時代の畫院の畫人にして、人物樓觀を巧にす、嘗て乾隆戊子の御題烏什戰圖一軸を畫きて名あり、また清朝に歸化したる伊太利人郎世寧（本名を Joseph Castiglione ヂョセフ）と合畫して馬技圖一卷を作りしことあり、郎世寧は純然たる支那畫をよくしたりと雖、畫く所は多く洋畫と支那畫とを折衷したる傾あり、張廷彦のよくこれと合畫せしことによつて彼の畫技の凡ならざるを知るべし、この圖は前集收むる所の風俗畫の一半にして家屋人物の描法頗る巧を盡し、當時の院體畫風之れによつて窺ふに足る、さればこの圖の如きは好個の研究資料と稱するを得べし。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

411
43

邊文進筆花鳥圖

Painting of Bird and Flowees. By Henbunshin.
(14th Century)

子爵 末松謙澄君藏

元の朝廷には畫院の設けなかりしが、明に至りて再び宋の遺制を繼ぎて官の畫院を置かれたり、其の規模素より宋代のものゝ如く壯觀南宋に比して遜色無かに堪能なるもの多かりしため、名家相繼いで出で、其の壯ならざりしが、歷世の王者畫技らんことするに至りぬ。太祖は亂離の世態を治めて、統一の基を開きし人なれば、其の性峻嚴酷烈にして、課刑重きに過ぎ、畫院に名を掲ぐるものにして、禍に遇へる者亦數名ありき、然かも畫院は尙ほ此の盛觀を保てり。

邊文進は、世祖が永樂年間に、汎く天下の名手を徵召したる際、召されて京師に來れる者。宣德年間に英武殿の待詔となる。名は景昭又鸞と名づく。隴西の人なり。人と爲り灑落にして畫を善くし、花果翎毛を以て召に應じたるなり。筆法法墨皆佳ならざるなく、宋元の後殆んど匹儔なしと云ふ。

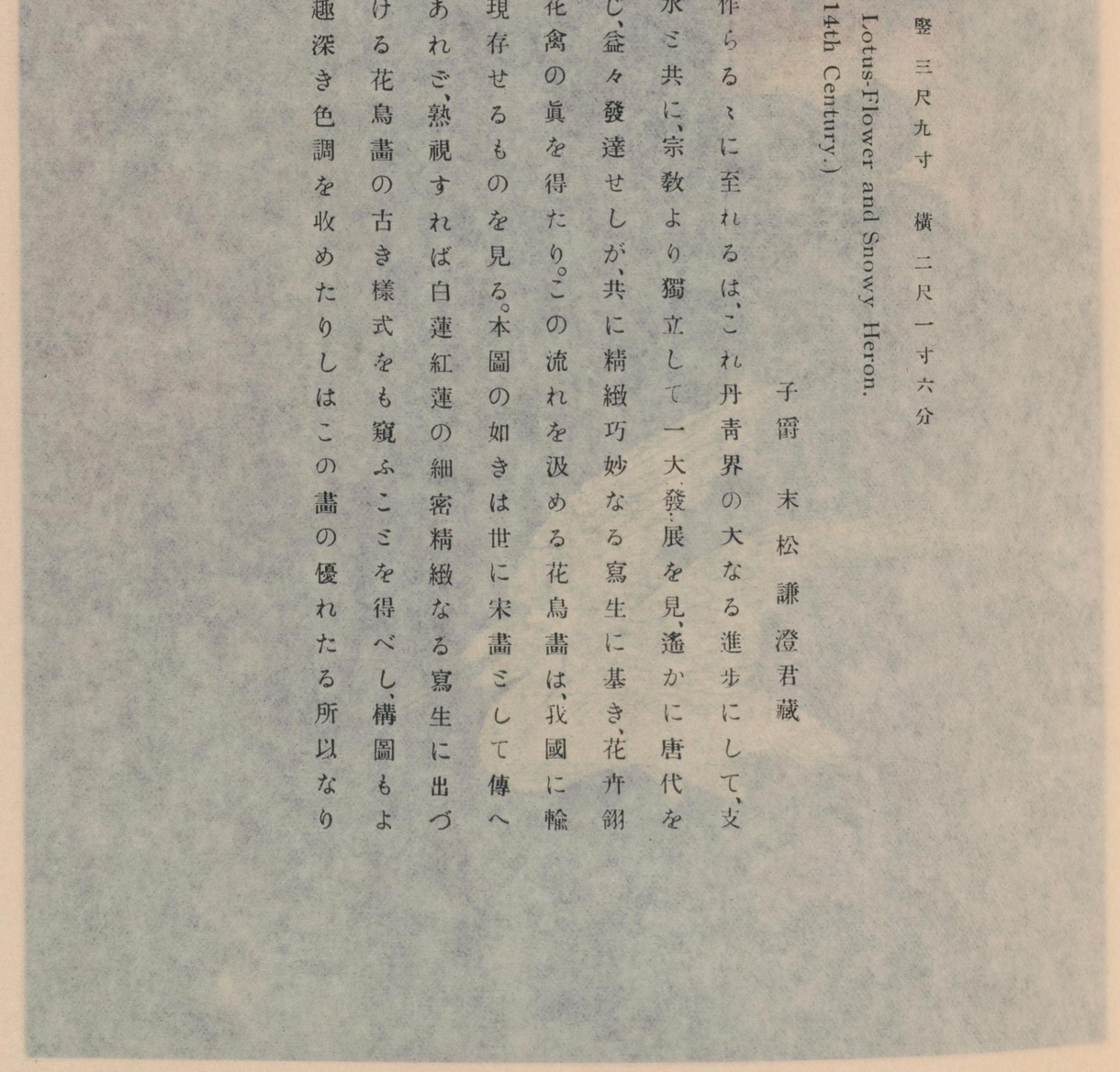
邊文進の門下には、其の子に楚祚、楚芳、楚善あり。其の徒に錢永、劉奇、張克信等あり。果實と莖葉との傳彩配色極めて妙、小禽の象形亦寫生に基いて、然かも一種の畫趣に富めり。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

411
43

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』 請求記号 寄別5-1-1-4

411
43



紅蓮白鷺圖

絹本　竪三尺九寸　横二尺一寸六分

Painting of The Red Lotus-Flower and Snowy Heron.
(14th Century.)

子爵　末松謙澄君藏

繪畫が宗教の羈絆を脱して、鑑賞の爲めに作らるゝに至れるは、これ丹青界の大なる進歩にして、支那にありては、長く宋代に於て花鳥畫が山水と共に、宗教より獨立して一大發展を見、遙かに唐代を凌駕せり。而して黄氏體徐氏體の二樣を生じ、益々發達せしが、共に精緻巧妙なる寫生に基き、花卉翎毛皆天眞を得、賦彩何れも濃麗にして、よく花禽の眞を得たり。この流れを汲める花鳥畫は、我國に輸入せられたるもの少なからずして、猶往々現存せるものを見る。本圖の如きは世に宋畫として傳へらるゝものにして、頗る古色蒼然たるものあれど、熟視すれば白蓮紅蓮の細密精緻なる寫生に出づるものなるこゝを看取し得べく、支那に於ける花鳥畫の古き樣式をも窺ふことを得べし、構圖もよく整ひ紅蓮に白鷺を配して、賦彩の上に興趣深き色調を收めたりしはこの畫の優れたる所以なりとす。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

錢舜擧筆花籠圖

Painting of Flowers in Basket. By Senshunkyo.
(14th Century.)

末松子爵家藏

錢選字は舜擧、玉潭と號す、別に巽峯、清癯老人、習嬾翁、霅川翁等の號あり、宋末元初の人なり、元代の初に當り亡宋の遺民多くは元朝に仕官して榮達を得るあるに反し、舜擧獨り嶄然徵召に應ぜず、詩畵に流連して一生を終ふ、其豪邁不屈の慨ありしを想見するに足る。人物、花鳥、山水善くせざるなし、筆技精巧賦彩纖麗、後世其性行畵品と相待て敬重せらるゝ故なきにあらず、（今を距る凡六百年）

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

呂紀筆花鳥圖

絹本　竪五尺　橫二尺七寸五分

Painting of Flower and Birds. By Roki. (15th Century.)

子爵　大河内正敏君藏

呂紀字は廷振、樂愚と號す。寧波の人なり。花鳥畫に巧妙の特技を有し、明畫中花鳥畫にありては、殆んど獨歩の境を示せり。明畫錄、無聲詩史等によれば、彼が經歷を知るに足るものあり。

呂紀は初め邊景昭に學び、後唐宋諸家の法を摹倣し、始めて自家の妙所を發揮するに至れり。弘治年中、林良と共に孝宗に徵されて、仁智殿に事へ、錦衣指揮使に至れり。當時の畫家彼が榮譽を羨望せざるものなかりしといふ。實に呂紀は黃氏體を祖述したるものにして、妍麗巧緻の院體を作り、禽鳥の類、殊に鳳鶴孔雀鴛鴦の類に至りては、設色鮮麗、生氣奕々、當時其の名聲を擅にしたり。呂紀は啻に翎毛を巧にしたるのみならず、また山水人物倶に妙を盡せり。

斯くの如き名手なれば、夙に我國に於ても呂紀の令名嘖々たるものあり。且つ東山時代に漢畫賞鑒最も流行しければ、當時明より來舶されたる畫幅夥少にはあらざりしなり。呂紀の盛時は即ち我が東山時代に稍後れたりと雖、彼の作品は大に我國に歡迎せられたれば、我國に入りしもの少なからざりしなるべし。現時呂紀と傳ふるもの甚だ多きに見るも、彼が嘖々の聲譽を我國にまで、擧げしを知るべし。然も優秀なるもの甚だ乏しきは、遺憾の至りなり。本圖の如きは、大幅双對の一にして、卉木小禽を巧に配して、布置整然、搆圖に苦心の跡を見るべく、よく彼が特色を發揮したるものにして、呂紀の樣式を考察するに、充分なる資料とすべし。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

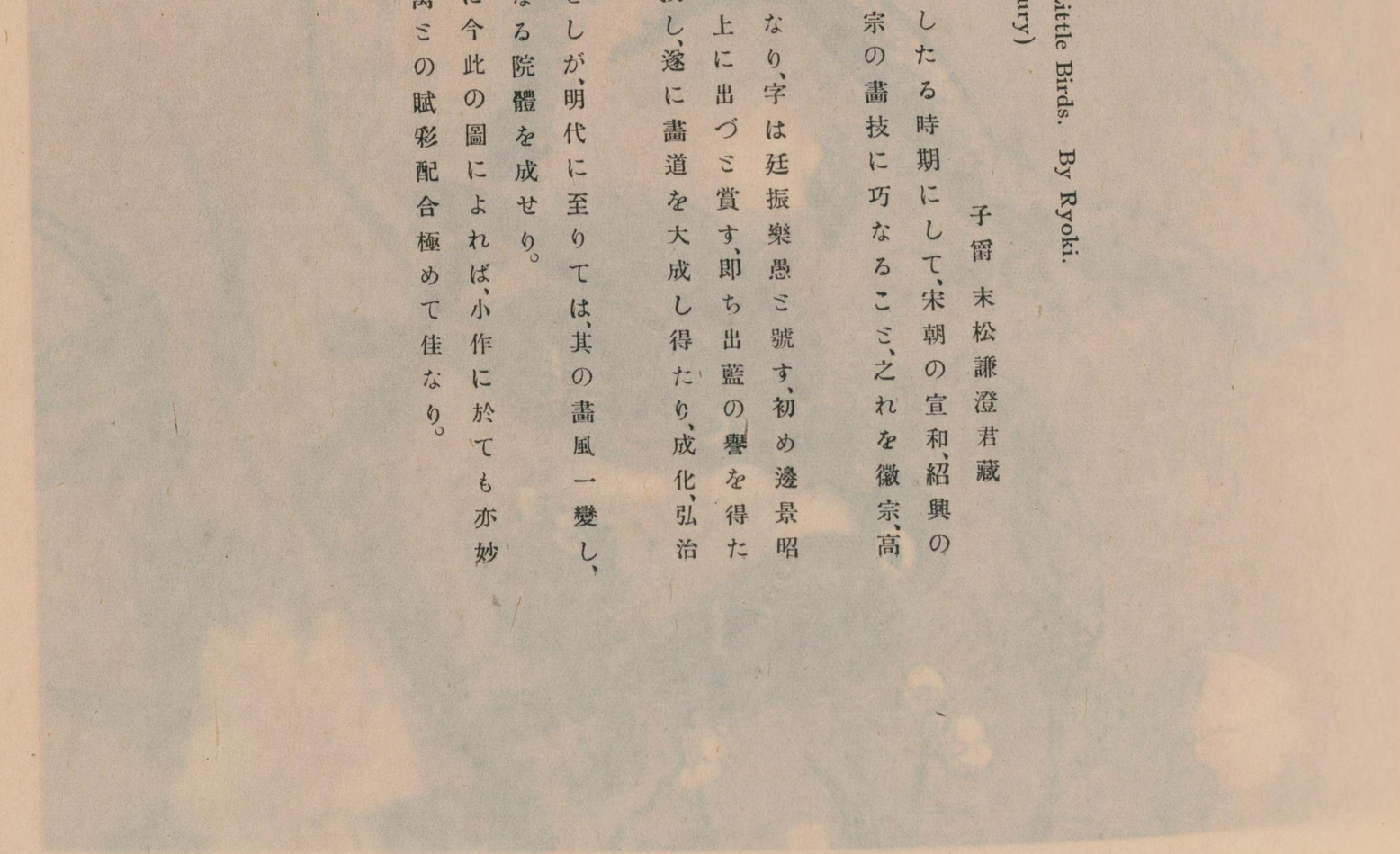
国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

411
43

呂紀筆花卉小禽

Painting of Flowers and Little Birds. By Ryoki.
(15th Century)

子爵 末松謙澄君藏



宣德、弘治の頃は、明朝の畫院が、最も盛觀を呈したる時期にして、宋朝の宣和、紹興の畫院の光彩陸離たりしにも比すべく、宣宗、孝宗の畫技に巧なること、之れを徽宗、高宗の彩筆にも類ふべき時代なりき。

呂紀は、此の盛時に於ける畫院の名家の一人なり、字は廷振樂愚と號す、初め邊景昭が花鳥を學ぶ、袁忠敬之れを見て、技は景昭の上に出づと賞す、即ち出藍の譽を得たるものといふべし、又よく唐宋の名畫を臨摸し、遂に畫道を大成し得たり、成化、弘治の頃錦衣に官たり、仁智殿に直す、

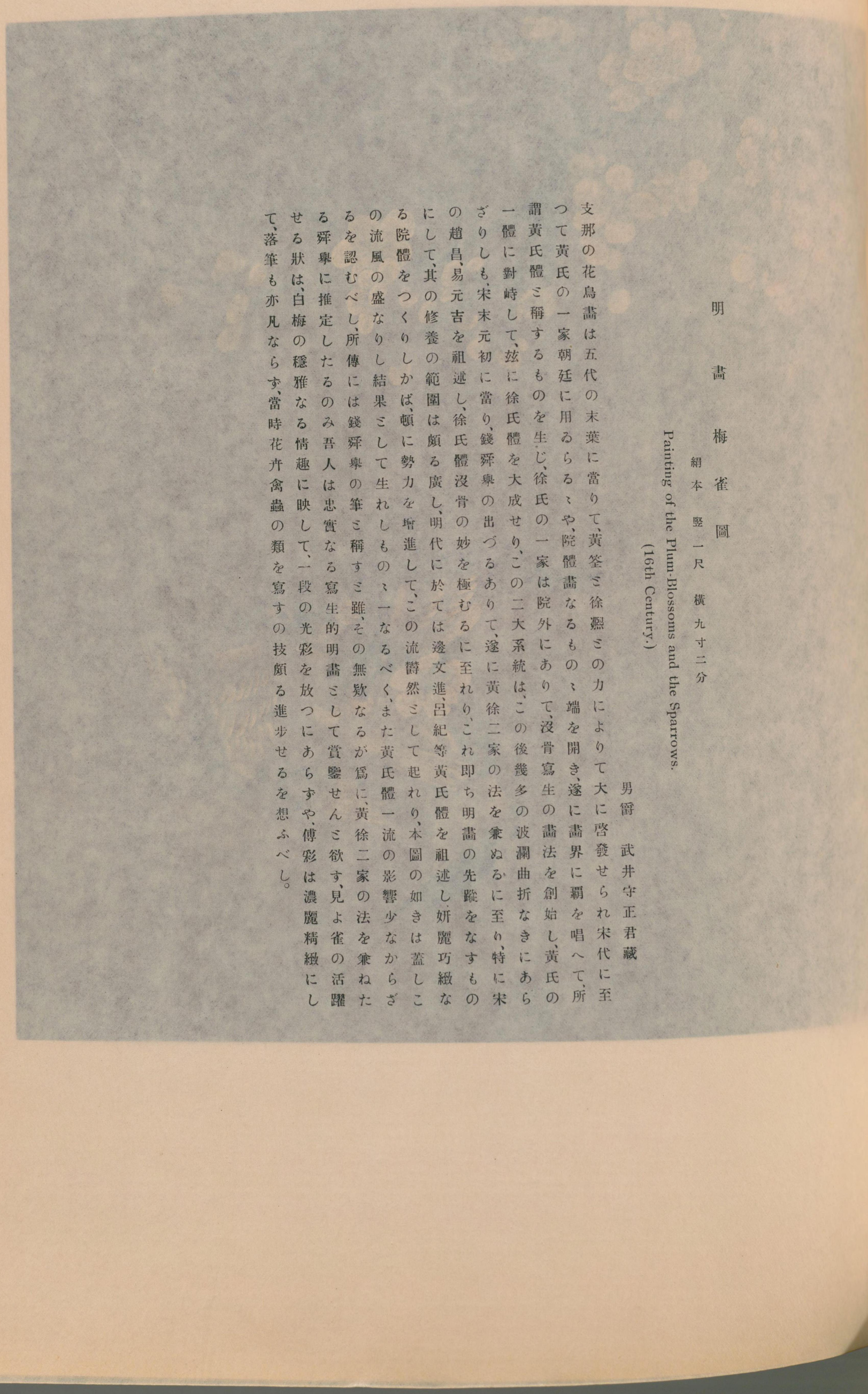
花鳥畫は、元代に在りては、徐黃二家を祖述せしが、明代に至りては、其の畫風一變し、邊文進、呂紀等は、黃氏體によりて、精緻麗細なる院體を成せり。

呂紀の作と稱するもの、殊に大作多し、然るに今此の圖によれば、小作に於ても亦妙技頗る觀るべきを知るに足れり。花卉と小禽との賦彩配合極めて佳なり。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

411
43



明畫梅雀圖

絹本竪一尺 橫九寸二分

Painting of the Plum-Blossoms and the Sparrows.
(16th Century.)

男爵 武井守正君藏

支那の花鳥畵は五代の末葉に當りて、黃筌と徐熙との力によりて大に啓發せられ宋代に至つて黃氏の一家朝廷に用ゐらるゝや、院體畵なるもの〻端を開き、遂に畵界に覇を唱へて、所謂黃氏體と稱するものを生じ、徐氏の一家は院外にありて、沒骨寫生の畵法を創始し、黃氏の一體に對峙して、茲に徐氏體を大成せり、この二大系統は、この後幾多の波瀾曲折なきにあらざりしも、宋末元初に當り、錢舜舉の出づるありて、遂に黃徐二家の法を兼ぬるに至り、特に宋の趙昌、易元吉を祖述し、徐氏體沒骨の妙を極むるに至れり、これ即ち明畵の先蹤をなすものにして、其の修養の範圍は頗る廣し、明代に於ては邊文進、呂紀等黃氏體を祖述し、妍麗巧緻なる院體をつくりしかば、頓に勢力を增進して、この流欝然として起れり、本圖の如きは蓋しこの流風の盛なりし結果として生れしもの〻一なるべく、また黃氏體一流の影響少なからざるを認むべし、所傳には錢舜舉の筆と稱すと雖、その無欵なるが爲に、黃徐二家の法を兼ねたる舜舉に推定したるのみ吾人は忠實なる寫生的明畵として賞鑒せんと欲す、見よ雀の活躍せる狀は、白梅の穩雅なる情趣に映して、一段の光彩を放つにあらずや、傅彩は濃麗精緻にして、落筆も亦凡ならず、當時花卉禽蟲の類を寫すの技頗る進歩せるを想ふべし。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

411
43

王建章筆　山茶花圖

紙本　竪九寸一分　横一尺四寸二分

Painting of Thea Sasanqua. By Ōkenshō.
(17th Century.)

廉南湖君藏

王建章字は仲初、硯田莊居士と號ふ、福建泉州の人にして明末の遺老たり、宮紫玄及び渾香山と相友とし善く、書畫を以て互に相娯樂す、宮氏春雨草堂筆記にいふ、初喜んで佛像を畫き自ら李公麟に讓らずといひ、山水は董源を祖述し筆力雄健羈勒すべからざるの概ありと、香山は更に其の墨五彩あるを稱揚せり、然れども王建章の盛時は崇禎の末造に當り、南北沮絶し、戰亂の時代なりければ、伏して温陵に處り、中原に游涉せざりしを以て、著しく世の稱するところにあらざれば、揮毫を請はるゝも、輕々しく落筆せざりしにより、作品多からず、然るに廉南湖氏即ち小萬柳堂主人は、王建章の畫を藏すること頗る多く、南湖一家の祕笈となせり。

本圖は花卉を寫せる卷物の最終の部分にして、彼が沒骨の手法に於て、輕妙なる手腕を有したりしを看取し得べく、彼が妙技を深く味はんには餘りに粗に過ぎたりと雖、泉州府志に、王建章が寫生をよくするを以て一時の絶藝たりと賞揚せるを見れば、彼が寫生の方面に嶄然頭角を表はしたるものありしを知るべし、廉氏所藏の王建章の筆少なからざるも色彩を以てせるものなかりしかば、本集即ちこれを收めぬ、欵識に崇禎戊寅とあるによりて其の十一年なるを知る。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

411
43

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

411
43

暉南田筆蘆雁圖

紙本　竪九寸一分　横一尺四寸二分

Painting of Chrysanthemum. By Unnanden.
(1633–1690)

廉南湖君藏

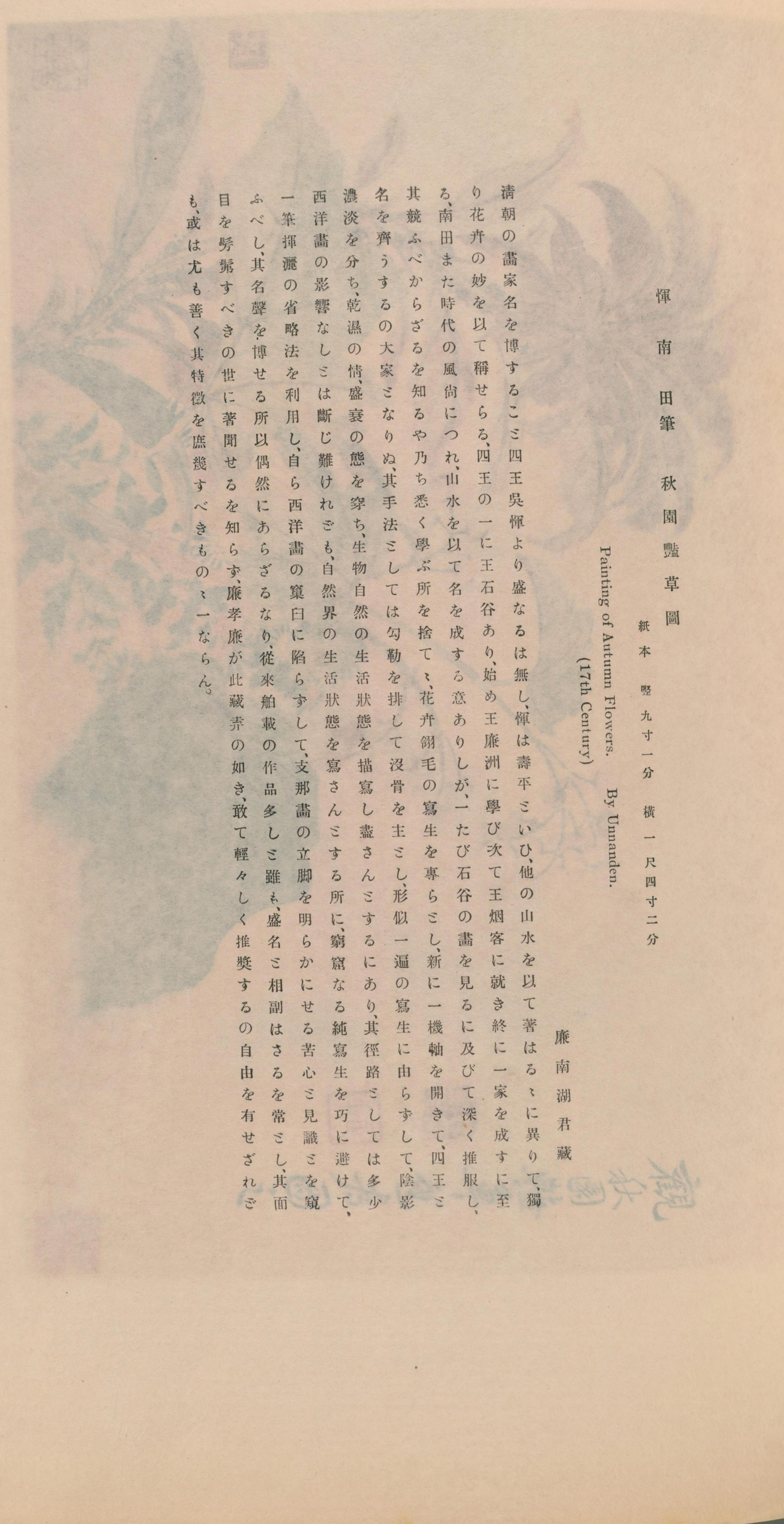
本圖は數葉を以て作れる畵帖中の一圖にして、秋園蠶草圖も亦この畵帖中にあり、中華民國廉南湖君の珍藏する所にして、何れも草花を寫して濃麗妍鮮を極む、蓋し南田山水畵を捨てゝ花卉を專らゝしたりゝ傳へらるゝ程ありて、彼が得意の作たるを思ふべし、東籬圖は特に菊花の彩色に苦心の跡を見るべく、色彩を施せる花瓣に、更に胡粉を用ゐて、菊花の眞を寫さんゝ試み、相應の効果を收むるこゝを得たり、葉は沒骨法によりて、濃淡を以て表裏を表はし、岩石また常の皴法を用ゐたれゞ、熟練の筆見るに足るべし、秋園蠶草圖ゝ合せ見れば、南田の寫生を標榜して、一機軸を開きたる所以を窺ふを得ん。

南田名は格、字を壽平ゝいひ、又正叔ゝもいふ、南田は其の號にして、白雲外史、雲溪外史、東園生等の數號あり、江蘇武進の人にして、兼ねて詩文を善くし、毘陵六逸に冠たりゝいはれ、また書法を巧にし、世に三絕ゝ稱せらる、されば吟詠書畵を以て自ら娛み、敢て名利に馳せず、故に遨遊數十年にして貧窶故の如くなりしゝいふ、居所を甌香館ゝ稱し、交遊する所皆當世の名士なり、明の崇禎六年に生れ、清の康熙二十九年卒す、年五十八。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

411
43

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4



揮南田筆　秋園豔草圖

紙本　竪九寸一分　横一尺四寸二分

Painting of Autumn Flowers.　By Unnanden.

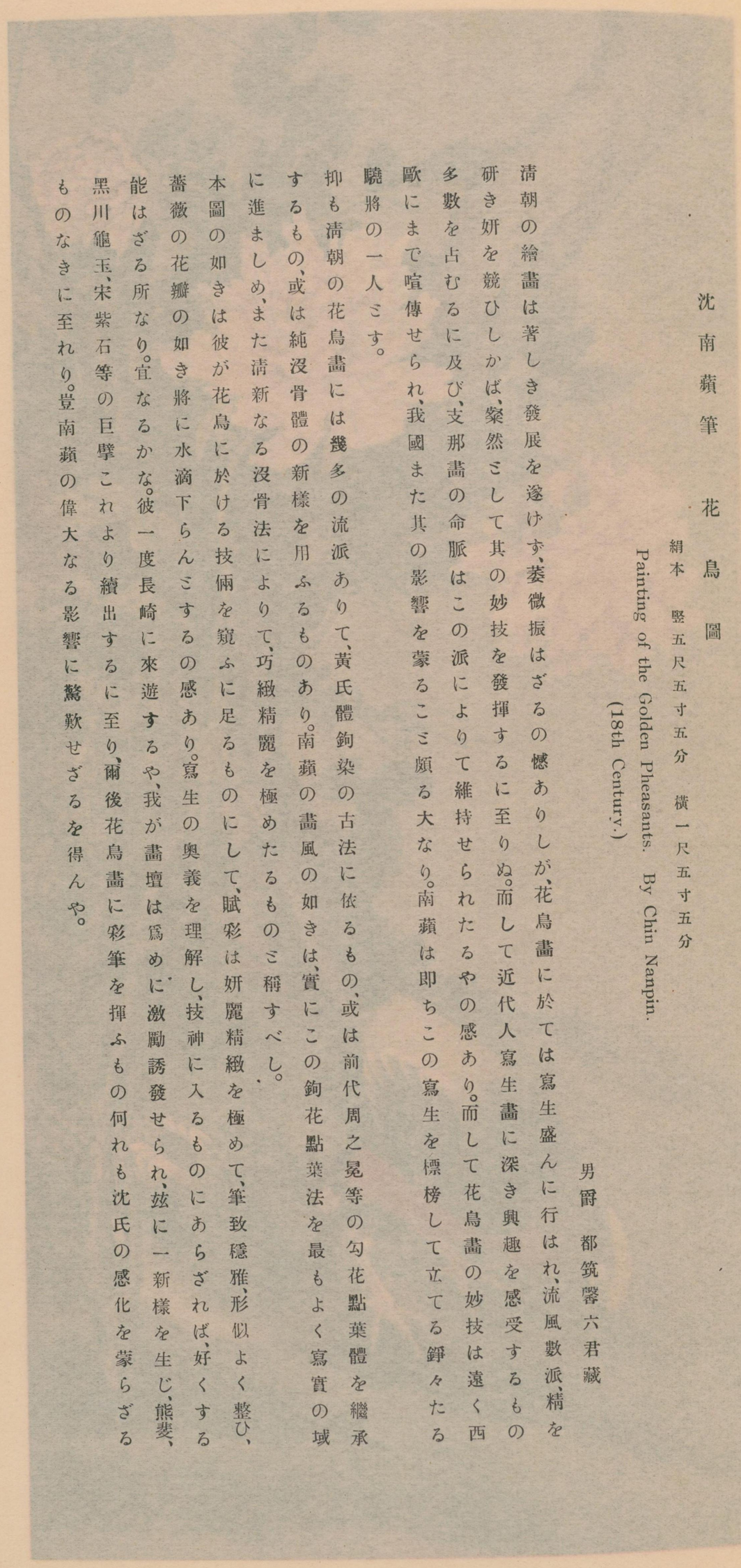
(17th Century)

廉南湖君藏

淸朝の畵家名を博すること四王吳惲より盛なるは無し、惲は壽平こいひ、他の山水を以て著はるゝに異りて、獨り花卉の妙を以て稱せらる、四王の一に王石谷あり、始め王廉洲に學び次て王烟客に就き終に一家を成すに至る、南田また時代の風尙につれ、山水を以て名を成す意ありしが、一たび石谷の畵を見るに及びて深く推服し、其競ふべからざるを知るや乃ち悉く學ぶ所を捨てゝ、花卉翎毛の寫生を專らこし、新に一機軸を開きて、四王こ名を齊うするの大家こなりぬ、其手法こしては勾勒を排して沒骨を主こし、形似一遍の寫生に由らずして、陰影濃淡を分ち、乾濕の情、盛衰の態を穿ち、生物自然の生活狀態を寫さんこする所に、窮窟なる純寫生を巧に避けて、西洋畵の影響なしこは斷じ難けれごも、自然界の生活狀態を寫さんこする所に、窮窟なる純寫生を巧に避けて、一筆揮灑の省略法を利用し、自ら西洋畵の窠臼に陷らずして、支那畵の立脚を明らかにせる苦心こ見識こを窺ふべし、其名聲を博せる所以偶然にあらざるなり、從來舶載の作品多しこ雖も、盛名こ相副はさるを常こし、其面目を髣髴すべきの世に著聞せるを知らず、廉孝廉が此藏弆の如き、敢て輕々しく推奬するの自由を有せざれごも、或は尤も善く其特徵を庶幾すべきもの一ならん。

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4



沈南蘋筆　花鳥圖

絹本　竪五尺五寸五分　横一尺五寸五分

Painting of the Golden Pheasants. By Chin Nanpin.

(18th Century.)

男爵　都筑馨六君藏

清朝の繪畫は著しき發展を遂げず、萎微振はざるの憾ありしが、花鳥畫に於ては寫生盛んに行はれ、流風數派、精を研き妍を競ひしかば、粲然として其の妙技を發揮するに至りぬ。而して近代人寫生畫に深き興趣を感受するもの多數を占むるに及び、支那畫の命脈はこの派によりて維持せられたるやの感あり。而して花鳥畫の妙技は遠く西歐にまで喧傳せられ、我國また其の影響を蒙ること頗る大なり。南蘋は即ちこの寫生を標榜して立てる錚々たる曉將の一人とす。

抑も清朝の花鳥畫には幾多の流派ありて、黄氏體鉤染の古法に依るもの、或は前代周之冕等の勾花點葉體を繼承するもの、或は純沒骨體の新樣を用ふるものあり。南蘋の畫風の如きは、實にこの鉤花點葉法を最もよく寫實の域に進ましめ、また清新なる沒骨法によりて、巧緻精麗を極めたるものと稱すべし。

本圖の如きは彼が花鳥に於ける技倆を窺ふに足るものにして、賦彩は妍麗精緻を極めて、筆致穩雅、形似よく整ひ、薔薇の花瓣の如き將に水滴下らんとするの感あり。寫生の奥義を理解し、技神に入るものにあらざれば、好くする能はざる所なり。宜なるかな。彼一度長崎に來遊するや、我が畫壇は爲めに激勵誘發せられ、茲に一新樣を生じ、熊斐、黒川龜玉、宋紫石等の巨擘これより續出するに至り、爾後花鳥畫に彩筆を揮ふもの何れも沈氏の感化を蒙らざるものなきに至れり。豈南蘋の偉大なる影響に驚歎せざるを得んや。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

沈南蘋筆花鳥圖

絹本　竪三尺　横一尺三寸八分

Painting of Flowers and Birds.　By Chin Nanpin.
(18th Century.)

青木定謙君藏

本邦の近世畫界に於ける精緻巧妙なる寫生畫は、顯著なる發展を遂げ、幾多の流風を生じたるも、其の先は近く沈南蘋の畫風に負ふ所頗る大なるは、吾人の特に興趣を感ずる所なり。

抑清朝の繪畫は、花鳥畫に於て最も特殊なる發達をなし、黃氏體鉤染の古法に依れるもの、或は勾花點葉體を以て、前代の風格を繼承するもの、成は純沒骨體とも稱すべき新樣式等ありて、南蘋は實に勾花點葉法を以て、よく寫生の眞諦を得、また清新なる沒骨體に精緻秀麗なる特色を發揮せり。本圖の如きは、即ち沒骨法に依れるものにして、款識に徐崇嗣の筆を祖述せる旨を明記せり。徐崇嗣は北宋徐熙の孫、畫院の外にありて、沒骨寫生の畫法を創始し、加之祖父の輕淡野逸の手法を傳へて、當時院體の畫式を大成したる黃氏一派に對峙せり。崇嗣、連枝花禽に長じ、果實の地に墜つる樣を畫きて、具に形似を得たりといふ。以て其の寫實に長ぜるを知るべし、されば後世沒骨法を學ぶもの、多く徐崇嗣の法を師とするに至れり。

今沈南蘋の畫風を見るに、古の徐氏黃氏兩體及び林良等の寫意派を渾然融合したる勾花點葉體を根柢とし、寫生に一新生面を開きたるものにして、また巧緻精麗の畫風を以て、徐氏體變化の妙を極めたる沒骨體に筆を染めたるものといふべし。同じく沒骨法といふも雖も北宋時代は、描線皆無といふにあらずして、細勾の描線賦彩の爲めに負け、僅に草苔の類に、線畫なきに過ぎず、故に黃氏體が勾勒塡彩を專らとせるに比して、沒骨の名を得たるものにして、南蘋は描線無しといふ。

本圖は即ち南蘋が宋人の法に倣ふて沒骨法を試みたるものにして、用筆秀逸設色清麗よく寫生の能事を盡せるもののみ。

かゝる清新なる畫法の一度我が國に移植せらるゝや、これまで形式的畫法に倦みたる畫界は翕然としてこの法を學ぶに至れり。熊斐宋紫石等以下の所謂長崎派は云ふに及ばず、圓山應擧の寫生派亦これに負ふ所頗る多く、華山椿山の徒亦この法によりて、直接間接に我が畫界に貢獻したること甚だ大なり。南蘋の遺せる効果亦偉ならずとせんや。

国立国会図書館　　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号　寄別5-1-1-4

国立国会図書館　タイトル『原色和漢名画百種』　請求記号 寄別5-1-1-4